

NACT YOUTH PROJECT
2024

美術館に生まれた
新しい「表現の学び舎」

3期生

新美塾!

記録集

NACT YOUTH PROJECT
2024

美術館に生まれた
新しい「表現の学び舎」

3期生

新美塾!

記録集

目次

ご挨拶.....	03	トークイベント 「『NACT YOUTH PROJECT 新美塾!』 とは何だったのか?」記録	54
新美塾!余韻 吉澤菜摘	04		
中高生向けの“表現の塾”を作る その3 下道基行	06	ゲスト・アーティスト寄稿	58
TIME LINE	10	本気すぎる下道基行 山下陽光 西大井のあな見学 能作文徳 こころからだあたま 奥村雄樹 無題 ミヤギフトシ	
集会	12		
ミッション	13		
ラジオ / グループLINE	14	卒業生(2期生)と保護者のアンケートから	62
手帳	15	卒業生(1期生)と保護者のアンケートから	64
ミッションと集会について	16	スタッフコメント	66
塾生の感想から	50		
卒業後の保護者のアンケートから	52		

ご挨拶

新しい文化の創造と発信の場となるべく2007年に開館した国立新美術館は、幅広い世代に向けて教育普及プログラムを実施してきました。私たちは、美術をはじめ芸術・文化は人々、特に心身の成長期である10代にとって欠くことのできない重要なものであると考えていますが、中高生を対象とした活動機会は決して十分ではないという課題を抱えていました。そこで、開館15周年となる2022年、新たに立ち上げたプログラムがこれからの時代を担うユースのための《NACT YOUTH PROJECT 新美塾!》です。本記録集では、新美塾!最後の年となる第3期(2024年7~12月)の活動と、年度末に実施した新美塾!の3年間を振り返るトークイベントについて報告いたします。

“新しい表現の学び舎”をうたう新美塾!では、塾長を務めるアーティストの下道基行さんの導きのもと、半年間にわたって中高生の塾生たちが表現について共に考えます。「自分の日常を観察する」ことを重視した活動の大枠は決まっていますが、内容やスケジュールは、各期の塾生の反応や特性に合わせて新たに考案します。第3期では初めての試みとして、ゲストのアーティストにミッションや集会の企画に深く関わっていただき、1期生や2期生とは異なる、3期生たちならではの力を引き出すプログラムを行いました。

このような長期・少人数体制で密度の高いプログラムを実現してきた新美塾!の成果は、参加者数などの数値で測ることはできません。私たちはこの取り組みについて、振り返って考察する時間の必要性を感じ始め、第3期の活動を以て新美塾!を終了することとしました。この終了は単なる“停止”ではなく、美術館のユースプログラムの意義について今一度考え、さらなる可能性を探る次の段階への“進行”なのです。その初めの一步として、3期生が卒業した後には、当館研究員と下道さんが新美塾!の3年間を語るトークイベントを開催し、ご来場くださった皆様と、新美塾!で何が起きたのかについて、共有する機会を持つことができました。

第3期の活動にゲスト講師としてご参加くださったアーティストの奥村雄樹様、ミヤギフトシ様、オフ会で訪問させていただいた東京国立博物館、森美術館、ユトレヒト、プロジェクトの実施にご支援・ご協力くださいました株式会社小学館、モレスキン ジャパン株式会社、そのほかお力添えくださいました全ての機関と関係各位に、心より御礼申し上げます。

最後に、大変お忙しいなかにも関わらず、第3期も衰えぬ情熱を注いで、国立新美術館に新美塾!というユースの新しい居場所をつくってくださった下道塾長、本当にありがとうございました。

国立新美術館



新美塾！ 余韻

吉澤菜摘

(国立新美術館 主任研究員 / 教育普及室長)



2025年、入梅の頃、記録集のエッセイを書くためにモレスキンの手帳を開いてペンを取った。静かに、私を取り巻く空間のどこかにある、かすかな余韻を探っていく。余韻の先には今もまだ、新美塾！という場所がある。少し大人になった塾生たちと下道さん、スタッフがいます。その場所は特定の空間でも地点でもない、新美塾！に関わる私たちが感覚的に認識して、「場所」という言葉に置き換えてきた何かだ。空梅雨で連日35度に達しようという暑さの中、昨夏歩いた鶯谷駅から東博までの道中の強い日差しを思い出しながら、今もある「新美塾！という場所」について説明を試みようと思う。

2021年、入梅の頃、新たに取り組もうとしているユースプログラムの骨子が見えつつあった。それは、10代を対象にアーティストによるワークショップを1か月の間に4回程度行うという、実現性はあるもののささやかなプランだった。同年の秋に下道さんにユースプログラムを共同で企画したいと依頼し、そこから新美塾！が胎動し始めるのだが、あれよあれよという間に「実現性があるささやかな骨子」は雲散霧消して、何に成長していくのかわからない、どんな体裁なのか説明ができない、未知の生き物のようなプロジェクトが動き出していた。コロナ禍で2年間を過ごし、先の見えない不安や制約ばかりの日々に対する鬱憤を振り払いたい衝動がスタッフにもあったのだと思う。下道さんとディスカッションを重ねる中で、気持ちが挫けたり鼓舞されたりを繰り返しながら、ただ、表現を必要としている10代が、自分が何者なのか考え悩んでいる10代が安心して参加できるプログラムを国立の美術館がつくるんだという思いから、私たちは新美塾！を始めた。

2022年6月の第1期の活動開始から、2024年12月の第3期の活動終了まで、新美塾！は半年間×3期実施された。活動拠点や集会所のような物理的な場所は無く、オンラインミーティングや毎回行き先が違うオフ会、LINEアプリなど、異なる形式・媒体を並行して用いながら塾生たちと下道さんは意見やアイデアを交換し合った。

そう、3年間ずっと、新美塾！には物理的な場所が無かった。国立新美術館の別館にある多目的ルームを使うことは数回あったが、そこが学舎だったわけではない。ならば、「新美塾！という場所」とは、一体何なのだろうか。

私にとってその場所は、生活そのものだった。オンラインミーティングのときは、パソコンの画面が新美塾！という場所だ。オフ会のときは、展覧会の会場や感想を語り合った部屋、集合した駅、移動の道程などが新美塾！という場所だ。ここまでは、記録集を読む人にとって想像の範疇だと思うが、新美塾！は私の生活にもっと深く、広く根を張り巡らせていた。下道さんと打ち合わせをしながら手帳を見返すときは、塾生の様々な発言を書き留めたページから新美塾！という場所が浮かび上がる。ミッションを発送するときは、塾生の反応を楽しみにしながら茶封筒に新美塾！という場所を閉じ込める。自宅に届いた封筒を開けて塾生がミッションに取り組むとき、そこがまた新美塾！という場所になる。グループLINEには毎日のようにメッセージや画像が投稿され、10代の日常を垣間見る。LINEに届くラジオは、家で掃除や洗濯をしながら聞くことが多かった。生活の中に、いつもその場所は存在していた。業務中や新美塾！のことを考えているときだけでなく、何かを見聞きしたり思ったり感じたりしている自分がある、そうした時空全てが「新美塾！という場所」だと私は捉えている。

3期生の感想を読んで、塾生たちも、新美塾！を同様に捉えていたのではないかと思った。表現について、自分について、何度も見つめ直して考える日常こそが、「新美塾！という場所」だ。卒業して、成長していく彼らの中で、新美塾！の存在感は段々薄れていくかもしれないけれど、自分の周りの世界と真摯に向き合い続ける彼らの新美塾！は終わらない。だから今も、私のそばからは、ユースたちと下道さんとつくれたあの場所の余韻が消えないのだ。

オフ会の移動中に塾生たちと交わす、他愛もない会話が大切だった。日常のひとコマを語り合っ、お互いを知っていく。表現とは何か、自分自身とは何か、その答え探しも日常を見つめることから始まるのだと思う。日常の観察を重ねた彼らが10年後、どんな人物になっているのかを想像すると、胸が躍る。この高揚感を得られるのは、3年間どうにか新美塾！を走らせ続けたスタッフの特権だ。そして、私たちはこのユースプログラムの主催者として、大人になった彼らにいつか問わなければならないことがある。——《NACT YOUTH PROJECT 新美塾！》は、あなたにとって何でしたか。

これからも誰かと一緒に「場所」をつくりながら、答えを聞ける日を待っている。

至急
重要

NACT YOUTH PROJECT
2024

美術館に生まれた
新しい「表現の学び舎」

3期生
募集

こくりつ
国立

新美塾！

「新美塾！」は国立新美術館がつくれた、13~18歳のための
「表現を学ぶ塾。ついに第3期!! 塾長はもちろん...



アーティスト!!
したみち
もヒユキ!!

下道基行!!

直島(香川県)に住み、世界で活躍!

美術館の
ウラ側見たり、
アーティストのスタジオに
行ったり、へんなミッションが
届いたり。みんなで作る表現の塾。

受付スタート! 3期生ボシュウ!

2024年7月~12月開塾

対象 13~18歳

定員 10人ぐらい

↑ オンライン説明会
もあります。

主催者 → 新国立新美術館
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

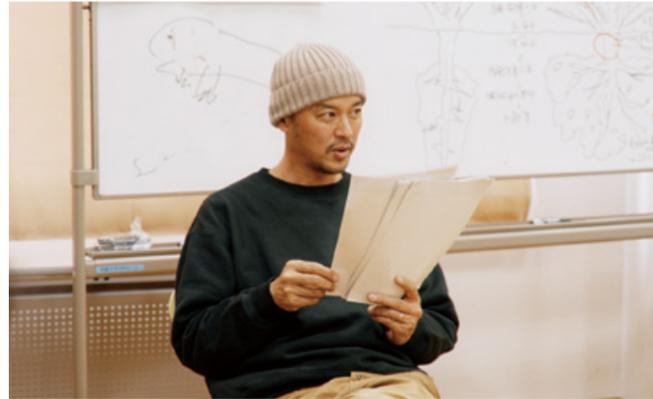
中高生向けの“表現の塾”を作る その3

下道基行

(新美塾! 塾長 / 写真家・美術家)

2024年12月15日、新美塾! 3期生の卒業式が終わった。これで活動自体もひとまず終了になった(《NACT YOUTH PROJECT》は続く予定)。少し静かになった国立新美術館のワークショップルームに佇んでいると、充実感と共にどこか心残りを感じた。

新美塾!の締めくくりとなるこの記録集の文章では、(3期生たちやゲストが起こした奇跡のような化学反応の数々を書きたいのだけれど…)中高生向けの“表現の塾”を作った3年間(準備も入れると4年間)を振り返り、徐々に僕の中に膨らんできた疑問を書きたいと思う。なぜなら、新美塾!のコンセプトや活動内容やその思考や成果については、すでに1期や2期の記録集に十分に書いたし、この記録集を未来のユースプロジェクトの活動を行う人々の参考にしてほしいと思うので。



新美塾!は「コロナ禍で学校の行事や会話すら不自由ななかで、表現することが密かな生きる力になっているような彼らと向き合った半年間のプログラム」と1期生の記録集には書いた。このプロジェクトを作る大きな原動力/きっかけは、やはりコロナウィルスの流行/パンデミックだった。逆に、この時期でないと生まれなかった企画とも言える。学生たちだけではなく、僕や美術館スタッフにも“今までの日常では生まれ得なかった別の隙間”が生まれたのだ。その“隙間”とは、時間であり空間であり予算であり、心の隙間だったかもしれない。

その中で、専門性を徐々に絞っていく段階の大学生ではなく、まだまだ道が自由に開かれている中高生と向き合ったのは、彼らが表現を通して息苦しい時代でも柔軟性を持って生きていけるような経験をする場所を作ってみようと思ったからだ。さらに学校教育という窮屈な社会に翻弄される彼らに特に開かれるべき“塾”だと考え模索した。

新美の教育普及チームと一緒に作った学び舎では、毎年塾生たちからたくさんの化学反応や手応えを感じたし、こちらも即興演奏のように反応しながら、多くの感動や学びを得ることでできた。本当に感謝しているし、今限りで幕を下ろすことになったのは本当に残念だ(可能なら新美塾!で10年くらいやりたかった)。

終了する理由

なぜ終了するかについてまず触れておくと、一番の理由は、“今までの日常では生まれ得なかった別の隙間”が、ある意味で再び閉じたからかもしれない。コロナ禍が終わり、中高生も美術館スタッフも作家である僕も、元の忙しい日常に戻り、コロナ禍で作ったこの塾のデザインが合わなくなってきたのだ。例えば、2週間に1回の課題と集会という密度は部活動やテストに忙しい中高生には無理が出てきたし、人ととんとん繋がりたい彼らには月1回のオフ会は少なすぎたり…。コロナ禍は過ぎ去り、社会はすぐにまた同じような元の日常に戻ろうとしている…。

でも、本当に以前と同じ世界に戻っているのだろうか…、以前より時計の針が速度を上げて進み始めたように感じるのは僕だけだろうか…。

この数年を経て、僕らはオンラインで会話や授業をすることを上手くできるようになった(コロナ禍以前には考えられなかったことだ)。それによって煩わしい対面は減り、便利になった。でも、何かを失ったようにも思う。新美塾!の塾生からもコロナ禍の1期生の募集の時ほどの熱気は徐々に感じなくなり、たくさんある習い事の一つとして美術館のワークショップに参加するような空気感が広がっているように感じていた。気のせい?

なんだろう…、表現がないと生きていけないような、でも普段美術館に来たことのないような、そんなユースとの出会いや体験を作ろうと手書きのポスターを学校に送りながら意気込んで始めたのに。なんだか、社会全体が何もなかったように元

に戻ろうとしているように感じて、全く別の形で元の日常の方向に動いていることへの強い違和感を覚える。

いや、塾生たちは全く悪くなく、原因は僕たちの方にある。意気込んでデザインしすぎていて、スタッフも僕もコロナ禍後の忙しい予定の中で、この塾を回せなくなったとも言える。さらに、毎回作る記録集や記録動画が、これから参加する塾生たちにとっての“ネタバレ”を引き起こし、彼らが驚くほどの新しいミッションや展開を僕がぶつけられなかったのかもしれない…。どちらにしても、正直、第3期の活動中は色々違和感を感じて悩んでいた。

構造から変えていけないといけない段階に入ったのだと密かに感じていた(だから第3期では二人のスペシャルゲストアーティストと一緒にミッションを作ったりもした)。その変えるべき構造は、時間感覚であり、空間感覚であり、僕という塾長自体なのかもしれないと思った。新美スタッフと話し合っ、新美塾!を終わりにすると決めた。《NACT YOUTH PROJECT》は今後も時代に合わせて形を変えながら続いてほしい、生き物のように。たくさんの卒業生を送り出しながら。新美塾!は今後続くプログラムの礎になったということだろう。



制作活動の変化

2018年に娘が産まれた。それは僕にとって大きすぎる出来事だったし、何かを“育てる”事への興味の芽生えであった。(道端の雑草の若葉すらかわいい日々。笑)これは新美塾!を作るもう一つのモチベーションになった。

子育ては、自分の思い通りにいかない他者との日常の“セッション”である。想定していた段取りは無惨にも崩され、日々自らが試される。これまで旅ばかりしていたのに、家から離れられない日が多くなる。時間をかけて考えて制作したり築き上げてきた生活は一変し、慣れ親しんだ自分の身体や思考が揺さぶられ、一方で、自分の古い細胞が壊され生まれ変わっていくような新しさを感じた。(芸人に例えるなら、ネタをしっかりと作って練習して舞台に臨むタイプが、急にバラエティ番組や大喜利に放り込まれたような?)そして2020年3月、子育てを日常の中心に据えながら行う新しい創作活動の場として、小さな離島/直島に移住することを決めた。小さなコミュニティに定住しながら島民と一緒にアーカイブを作るプロジェクト《瀬戸内「」資料館》を始めた*1。その活動の中で、週1回、放課後に島の小学生向けの“表現の塾”「しまけん」を始めた。それが、コロナ禍を経て、新美塾!へと繋がっていった。





美術館での仕事の中で

コロナウイルスの流行は、僕の生活面だけではなく、“アーティスト”としての仕事に与えた影響も大きかった。これまで旅が制作の中心であったが、ロックダウンによって国内外で移動すら困難な時期が多くなった。海外での展覧会では、輸送費の高騰が重い足枷となり、ミーティングや搬入、設営、オープニングなどがオンラインへ移行し、輸送できる作品サイズは厳しく制限された。子育てのために島に移住し、旅や移動を減らそうと動いていたが、それでも以前と同じようには制作も発表もできない状況に大きなストレスを感じるようになった。自分はこの状況／時代をどのように表現活動の中に取り込み、今しか生まれ

ない作品制作を行うことができるのか？試されている気がしていた。

子育ての日常にこの状況が重なり、「移動をなるべくしない制作スタイルに変え、小さなコミュニティの中に定住しながらフィールドワークを重ね制作する活動をしてみよう!」と決意した。そこで、(娘が手から離れる時期まで10年ほど)子育てを生活の中心としながら、日常のルーティーンを作り、小さい活動を重ねるような制作活動のスタイルを思い描いた。ハレ(旅や展覧会)ではなくケ(日常生活の地味な活動)を中心にする。そういった方針の変化は、美術館の“展示中心主義”的な活動への疑問へとつながっていった*2。

その結果として僕の制作や作品は、旅をして作品を作り美術館に置くスタイル／意識から、同じ場所に関わりながら人々と一緒に新しい場所を作り、そこで経験や体験や学びを生み出していく方向に変化した。それが、島での《瀬戸内「 」資料館》であり、東京での新美塾!になった。

さらにこの二つは、チームを作り動いていくという点においても新しい制作スタイルへの挑戦だった。バックバックひとつで動き回っていた制作スタイルから、別の専門性を持つスタッフとコミュニケーションをとりながらゆっくりと作っていく形へ。東京と島での二つの活動は、実は(自分がこれまで関わってきた)ミュージアムという場所に疑問を持ち、もう一度考え、内部からハッキングしたり、離島でセルフビルドする…、そんな模索であるのかもしれない。作品を空間に置いて数千人数万人が見てそれぞれを感じる、という形ではなく、直接人々と関わり、日々のセッションを積み重ね、双方向に学びを生みながら、プロジェクトを育てていく。2025年で、《瀬戸内「 」資料館》は活動開始から7年、新美塾!は4年となる。このコロナ禍を経て、ある意味で、僕の体を作っていた細胞は一度すっかり入れ替わり、即興(インプロビゼーション)性をもつ身体を手に入れたように感じるほど、大きく転換した。

コロナ禍以降へ

3密を理由にして、町内のイベントやお祭りが中止になった。コロナ禍以降、(以前より赤字だったものは)そのまま消滅してしまったものも多い。僕の島でも盆踊りがなくなったままだ。

美術館の中の活動も、コロナ禍以前に比べて、経済的な厳しさもあり、より合理性を求めるように変化したと聞く。展示などで現地視察をなるべくオンラインに頼るようになったり、若い作家やキュレーターたちが滞在してたくさんの経験をするアーティストインレジデンスなどの予算は大幅に減っている。コロナ禍で“入場者数で計る事ができない活動”は盛り上がっていくと思われたが、逆により多くの人やお金が集まる派手な企画を求められる時代へと移行していくのだろうか。

中高生10数人にスタッフ4-5人がついて半年行う新美塾!は、この時代の中で続けていくのは容易ではない。参加者人数の多さを評価する尺度、費用対効果でその価値を測られてしまうと一溜まりもない。コロナ禍の美術館の隅っこに生まれ、こうやって3期生まで送り出すことができたのは幸運だった。プロジェクトの中でたくさんの豊かな成果を僕たちは見てきたし、だからこういう活動を今後も大切にしたいと強く願っている。

そのためにできることは、参加者数などは別の評価をする物差しを自分たちで新しく用意することではないか…。そう考えて、新美塾!では、第1期終了時から記録集や記録動画を制作するを行ってきた。数字での効果を書けない分、塾生や保護者や企画者側、参加者一人一人の“声”を集めた。小さな成果をより広く伝える方法を考えてのこと。(半年間の塾生との

セッションが終わると記録集や動画の制作に入り、それが終わるとまたすぐに次の期の準備に入るので、僕もスタッフも年中この活動にかかりきりだった。)

さらに、2025年3月15日、トークイベント「『NACT YOUTH PROJECT 新美塾!』とは何だったのか?—美術館のユースプログラムを考える」を開催。これも、美術館という「社会教育施設」で、展覧会とは別の豊かな活動をどのように考えて続けていけるかを語り合うために企画した。オンライン配信があればもう少し多かったかもしれないが、現地まで来てこのイベントへ参加する人は少なかった印象で、やはり決して派手ではないこのような企画への関心の低さを感じて悲しくなった。でも、逆に、この3年間で新美塾!に参加した1期生・2期生・3期生の“卒業生”がたくさん参加してくれて、彼らのイキイキとした表情や言葉、近況報告を聞くことができ、ある意味でこのイベントは外へのプレゼンではなく、僕やスタッフや卒業生のための「卒業式」であり「新美塾!とは何だったのか?」を考える機会になり、それはそれでとても感動的だったし、大成功になった。

ある卒業生は、不登校気味だったけど高校に通い始めて友達ができたという。他にも、大学で美術館の研究をすることを目指し小論文を書いた子や、なんか卒業直後にアメリカ留学に飛び込んで行って自分の世界が一気に広がった子、大学に通いながら作品をつくりたくて美学校に通い始めた子、日常的に新美に展示を見に来てスタッフに連絡をくれる子もいるし、美術館の仕事に興味を持ちスタッフに質問にくる子もいる。僕もスタッフも美術館の中に新しい空間が生まれ、人々と繋がっていく可能性をヒシヒシと感じる4年間だった。

最後に、この記録集の読者も含めて、新美塾!に関わった人々の中から別の豊かな活動が芽生え、形を変えながら続いていくことを期待している。もちろん僕自身も続けていくし、そういう活動を応援し続ける。

だからこそ、卒業式やトークイベントが終わった今も、僕と教育普及チームは、この記録集をせっせと作っているわけだし。誰かの手に届くことを願って。

3期生、卒業おめでとう!

この新美塾!に参加してくれた塾生や保護者の方々、協力してくれたたくさんの方々、そして、新美でユースプログラムを始めてくれた逢坂館長、一緒に作ってくれた教育普及スタッフに感謝、本当にありがとうございました。

2025年6月11日 直島にて

*1 2019年9月より、直島の宮浦ギャラリー一六区を拠点に始まったプロジェクト。アーティストによるこのプロジェクトは瀬戸内海地域の景観、風土、民俗、歴史などについて調査、収集、展示し、地域にアーカイブを作る。福武財団が主催し、地域に住む人々や関わりを持つ人々とともに、各分野の専門家も交えて活動を展開し、島を見つめる新たな視点を提示していく。
*2 実際の数の比較などはしてないので僕の感想でしかないが、美術館の教育普及チームの仕事が、展覧会の関連事業を中心に動いているように見えていて、美術館が「社会教育施設」であるなら、教育普及チーム独自の活動がもっと美術館や地域へ広がっても良いのではないかと考える。



下道 基行 Motoyuki SHITAMICHI

1978年岡山生まれ。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。日本国内の戦争の遺構の現状を調査する「戦争のかたち」、祖父の遺した絵画と記憶を追う「日曜画家」、日本の国境の外側に残された日本の植民／侵略の遺構をさがす「torii」など、展覧会や書籍で発表を続けている。フィールドワークをベースに、生活のなかに埋没して忘却されかけている物語や日常的な物事を、写真やイベント、インタビューなどの手法によって編集することで視覚化する。

<http://m-shitamichi.com>



TIMELINE

全体の流れと 複数のメディアの設計

7 Jul.

8 Aug.

9 Sep.

10 Oct.

11 Nov.

12 Dec.

集会

オンラインで集まり発表し話し合う会と、実際にどこかの街に集合して体験するオフ会との2種類の集会在り混ざり合う。

7月7日

新美塾01 〈第1回オフ会〉
『新美だよ！全員集合！』
-第3期生入塾
-自己紹介
-ミッション#00

7月23日

新美塾02 オンライン講義
『ZoomとLINEを使って動画とテキストで遊んでみる』

8月6日

新美塾03 オンライン講義
『ミッション#01について』

8月18日

新美塾04 〈第2回オフ会〉
『鶯谷だよ！全員集合！』
-東京国立博物館
「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」

8月20日

新美塾05 オンライン講義
『ミッション#02について』

9月10日

新美塾06 オンライン講義
『ミッション#03について』

9月17日

新美塾07 オンライン講義
『スタジオビジット・特別講義：
奥村雄樹氏(ベルギー、オンライン)』

10月8日

新美塾08 オンライン講義
『ミッション#04について』

10月13日

新美塾09 〈第3回オフ会〉
『六本木だよ！全員集合！』
-森美術館「ルイズ・ブルジョワ展：地獄から帰ってきたところ
言っとくけど、素晴らしかったわ」
-ミッション#04番外編グループワーク「みんな遊びを考える」

10月29日

新美塾10 オンライン講義
『ミッション#05について』

11月5日

新美塾11 オンライン講義
『特別講義：ミヤギフン氏
(東京、オンライン)』

11月23日

新美塾12 〈第4回オフ会〉
『表参道だよ！全員集合！』
-ユトレヒト訪問
-ミッション#06講評
(ゲスト・アーティスト：ミヤギフン氏)

12月4日

新美塾13 オンライン講義
『ミッション#07について』

12月15日

新美塾14 〈第5回オフ会〉
『新美だよ！全員集合(最終回)』
-ミッション#08講評
-卒業式

12月6日

ミッション#08
『空想生物標本』byちさと
伝説/空想の生き物を作ってください。

『人間をつくる』byななみ

空想上の人間を作ってください。

『自分を表す形を作る』byりら

材料はなんでも良いので、自分を表す形を作ってください。

『オノマトペ』byたまき

タイトルがオノマトペになる作品を制作してください。

12月24日

ミッション#09
『新美塾の半年間』
新美塾はどうでしたか？
みっちーやスタッフに感想を伝えてください。

ミッション

6月27日

ミッション#00
『物語る』
あなたの部屋の中からひとつだけ物を持ってきてください。あなただけが知っている物語を持つ物を。

7月8日

ミッション#01
『日常の定点観測』
カメラで毎日4枚づつ7日間、写真を撮ってください。

7月30日

ミッション#02
『日常の定点観測』
1本目でつかんだ感覚を生かして
1本目の失敗を生かして
2本目、もう一週間やってみよう！

8月21日

ミッション#03
『使い方や意味を捨てる』
同封された物の本来の使い方/意味を一旦忘れましょう。形状や素材などを観察して、全く別の使い方をして、別の意味を与えて、それをレポート/発表しましょう。

9月24日

ミッション#04
『厳しいルールの一人遊び日記』
自分で自分にルールを課し、それに従って遊んでみる。毎日少しずつ、あるいは、ある日は朝から晩まで、ひたすら。使った道具や残った痕跡など「物的証拠」を保存する。普段は気づかない自分らしさや他の人との違いが現れるかも。

10月16日

ミッション#05
『新しい楽器を作ってください』
見たことのない楽器を考えて、実際に作って音を鳴らしてください。

11月13日

ミッション#06
『100年後の自画像』
100年後の自分を想像して、文章に書いてみてください。

11月26日

ミッション#07
『ミッションを考えてください！』
これまでのミッションを参考にしつつ、自分でミッションを考えてください。

交換手紙

毎回一人がゲスト。学校や日常の楽しかったことや悩みなどを話し、音楽をかける。12人のメンバーしか聞けない交換日記的ラジオ。マイクロコミュニティメディア。第3期では、送り主を明かさずに日記のような文章を郵送し合う「交換手紙」も始まった。

8月30日

ラジオ#01
ゲスト：ななみ

9月3日

ラジオ#02
ゲスト：ちさと

9月6日

ラジオ#03
ゲスト：いけべ

10月2日

ラジオ#04
ゲスト：たまき

10月4日

ラジオ#05
ゲスト：だにー

10月26日

ド・まんなかラジオ 第1回
MC:たまき
ゲスト:みふう

10月30日

ラジオ#06
ゲスト：りら

11月3日

ラジオ#07
ゲスト：りお

11月13日-20日

交換手紙 第1回
参加者:こなつ、みふう、ちさと、たまき、ななみ

11月16日

ラジオ#08
ゲスト：らら

11月19日

ラジオ#09
ゲスト：大森

11月21日

ラジオ#10
ゲスト：りく

11月25日

ラジオ#11
ゲスト：こなつ

11月27日

ラジオ#12
ゲスト：みふう

12月3日~16日

交換手紙 第2回
参加者:こなつ、みふう、ちさと、たまき、ななみ

グループLINE

全員で日常的な会話をするメディア。

手帳

好きに使える自分だけのアナログの記録メディア。日記帳でありスケッチブック。オフ会時に塾長がチェック。

2025年3月15日

トークイベント
『NACT YOUTH PROJECT
新美塾！』とは何だったのか？
—美術館のユースプログラムを考える
国立新美術館3階講堂にて新美塾！の
3年間を振り返るトークイベントを開催

集会



定期的にみんなで集合する。Zoomなどを使用し、『ミッション』をみんなで発表しあう《オンライン会》と実際に集まる《オフ会》がある。《オンライン会》は全9回(約1回/2週間)行われた。今回は、アーティストの奥村雄樹さんやミヤギフトシさんをゲストとしてオンラインのスタジオビジットを行い、さらに二人との関わりはミッション制作や講評会へと発展していった。《オフ会》は全5回(約1回/1ヶ月)行われた。《オフ会》は現地集会で毎回場所が変わる遠足/フィールドワークみたいな会。第3期では東京国立博物館と森美術館で、現代アーティストの個展を鑑賞して感想を共有したり、新美に集まってミッション(p.13を参照)をさらに展開させた。(集会の詳細な内容についてはp.22、24、26、28、29、32、34、35、45)(下道)

ミッション

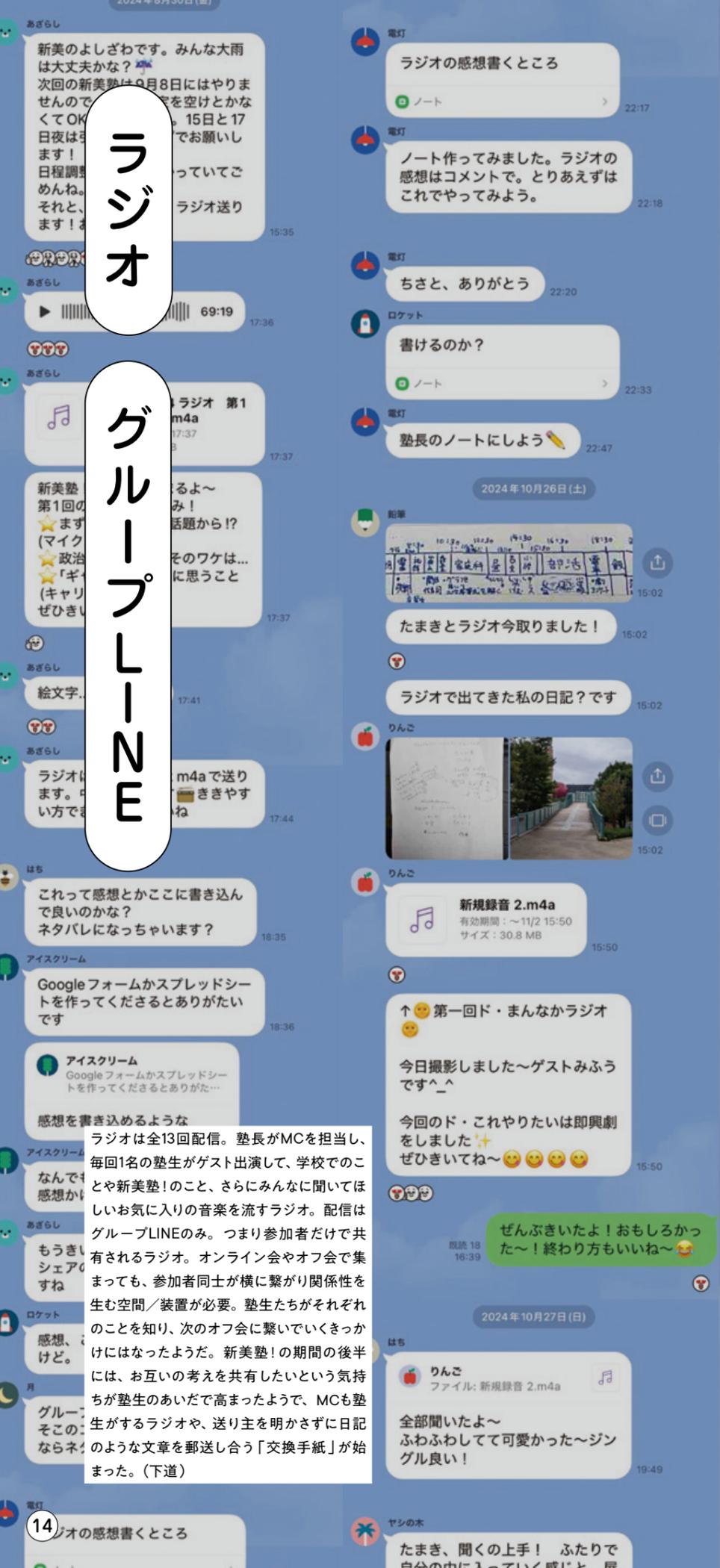


2週間~1ヶ月に1回、美術館から茶封筒に入った奇妙な通信教育キットが届く。開封すると、中には『ミッション』と呼んでいる宿題(時々ミッションに使う道具も)と、塾長からのお便りが入っている。ミッションは塾長からの指令であり課題であるが、内容は学校のそれとは大きく異なる。(ミッションの詳細な内容についてはp.16~)『ミッション』は塾のメインコンテンツ。塾生の部活動や勉強がどのくらい忙しいかなども聞きながら、塾長とスタッフが一緒に考えたミッションを郵送した。何かを作る課題ではなく、自分たちの日常を別の角度から見るこ

とに主眼を置いた課題にした。オンライン会で集合して、塾生たちはミッションに対するそれぞれの取り組みや作ったものを見せて感想を話し、参加するみんなでディスカッションを行う。毎回いろんな塾生の新たな特技や可能性が浮かび上がり、それぞれが全く別の世界観を生きていることや別の表現に興味を持っていること、さらに自分自身も特別であることが浮かび上がる体験になった。ミッションは全10回行われた。(下道)

ラジオ

グループLINE



手帳

新美塾!の半年間、塾生たちも、塾長と同じモレスキンの手帳を使うことにした。写真を貼り、メモして、ドローイングを描き、スケジュールを書く。その手帳はそれぞれの形でポロポロになり味わいが出てくる。捨てられない自分だけの手帳になるだろうし、さらに何年後かにふとこの手帳を開くことがあったら、10代の自分に出会えるかもしれない。僕がモレスキンの手帳を使い始めたのは、もう10年以上前、フランスに1年間すみながらヨーロッパ中を旅した時だ。それ以来1年に1冊、同じ手帳を買って、使い終わったら保存箱の中にしまってある。同じ手帳が別の時間や空間の中でポロポロになって、箱の中でそれぞれ個性的な存在感を放っている。近年、写真もメモもスケジュールもスマホに頼りがちだ。だからこそ、本気で手帳を使う経験は何か彼らの力になるのではないか。(下道)



初めの顔合わせの
前にメールで塾生に
送られました。

ミッション #00

『物を語る』

あなたの部屋の中から
ひとつだけ物を持ってきてください。
あなただけが知っている物語を持つ物を。

- 楽しい記憶
- 悲しい記憶
- びっくりした話
- 奇跡の物語
- 奇妙な物語
- など

物に関する物語が
自己紹介とつながっていきまいた。

NASAマ-7のマクカフ。
ちよとくたびれたぬいぐるみ。
頭がゴツの模型(!) など...
意味深な物が並びました。



ミッション #01

『日常の定点観測』

カメラで毎日4枚づつ7日間、写真を撮ってください。

普段の生活では
見えないもの、考えないこと
写真を通して思いを体験!

意識のない弟や
狙い撃ちで...

通学中のバスの中
で撮ろうとして...

- ・ミッションを開封したら、次の日からすぐに、送られてきたカメラで撮影を始めること。
- ・1日4枚のうち、1枚目は「毎日同じ人物」を2枚目は「毎日同じ風景」を撮ってください。あとの2枚は自由に撮って良いです。同じ人物や風景を撮影できない日はほかを写して良い。
- ・「人物」は家族や友人。「風景」は、部屋の窓から見える風景や近所や学校など、選んでください。
- ・【定点観測 (ていてんかんそく)】とは= 特定の場所から動かずに、あるいは場所を限定して物事を観察したり記録したりすること。
- ・撮影された写真は新美塾内でのみ共有するので、家族や友人をこっそり撮影するのもありだと思います。怒られない範囲で挑戦してみてください。
- ・なるべくカメラはバックに入れて常に持ち歩くこと。(ふとした瞬間に撮れます。)
- ・7日間の撮影が終了したら、すぐにカメラを返信用封筒に入れて送り返してください。こちらですぐに現像して、また送り返します。
- ・youtubeにあったカメラの使い方動画を参考まで。→→→



このミッションから
郵送で塾生のもとに
届けられました。

お便り 2024年7月号

ニッキーが毎回思ったことを
塾生に向けてつづいて
お便りが付いています

さてさて始めました新美塾!
初めのミッションは、これです。説明をよく読んでやってみてくださいね。
7月7日、七夕。初のオフ会。みんなで美術館に集まり、少しヘンな自己紹介をしました。
これは、他人を観察して、この人はどんな人なのだろう...と想像して、それを匿名で質問を投げかけてみるという体験。あまりやったことがない遊びのような体験だったのではないのでしょうか。「自分というのは、自分の中にあるもの」なのだろうか? 自分の外側にあるのだろうか? そんな疑問は昔からの人間のテーマの一つです。
でも今回、僕が少し気になったのは、みんなが書いた質問が、結構「優しい」のが多かったなあとということ。匿名なんだし、グイグイ突っ込んだ質問がもっとあってもよかったのかなあと、僕は思いました。
人と人の距離感。これって難しいよね。うん、大人でも悩む...
20年くらい前から、インターネットの時代になって、対面ではなく、匿名(とくめい)だからこそ、書けることと言えることがどんどん増えた。でも最近、なぜか逆に、どんどん窮屈な時代になってきているように思います。なぜなんだろう?
東京の人より大阪の人の方が距離が近いと言います。うん、グイグイ話しかけてくるし、事実近い。僕が住んでる島の子供たちも都市部より距離が近いと感じます。なぜなんだろう?
さらに、僕が最近感じるのは、この5年で人と人の距離感、つまり「どのくらいその人のプライベートに踏み込むか」みたいなことが距離がとても遠くなったように感じます。コロナの影響もあるのだと思います。いや、ぐいぐい踏み込めば良い、という意味ではなく、「表現」とは深く繋がっているテーマだと思うので気になっています。

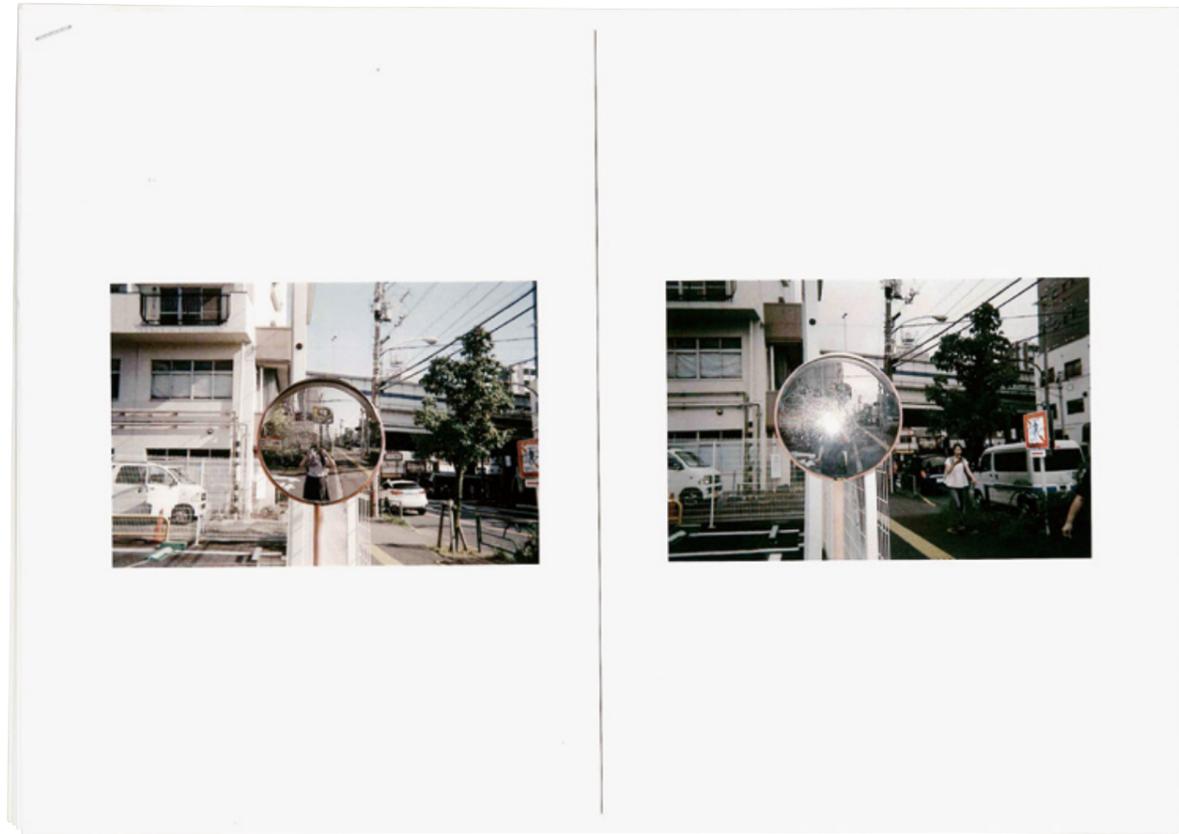
今回のカメラのミッション。それはあなたのあなただけの日常を、新美塾!の12人のメンバーとスタッフに共有してみるような課題です。なるべく「素のまま」の「生」の生活を撮影して、共有してみてください。家族や友人のふとした姿や表情。普段の部屋や近所の風景。あなたの日常はあなたしか見えていません。まるでスナイパーになったように、もしくは、子供の頃の虫取り網で昆虫採集するように、それを拾い集めてください。それを少しだけ共有して見せてほしいです。楽しみにしています。



・塾生の手帳の作り方を
前回のページ、自分だけ
の手帳を作る参考とし
て。



ミッション#01で塾生が撮った写真の中から下道塾長が一部を抜粋して並べ、写真集のような小冊子を作った。彼らしか写せない家族の写真も多かった。小冊子はミッション#02と共に塾生に郵送された。



ミッション#02

再チャレンジ!
35mmフィルムのインスタカメラを
もう一個、送りましょ

『日常の定点観測』

- 1本目でつかんだ感覚を生かして
- 1本目の失敗を生かして
- 2本目、もう一週間やってみよう!

恥ずかしがることはない!
見るのを恐れることもない!
しかし、被写体(人や風景)は尊重しつつ
もう一本撮影してみよう!

写真を撮るとき、
"何を主人公にするか?"
ミッチーからの
アドバイスが
ありました。

お便り 2024年7月後半号

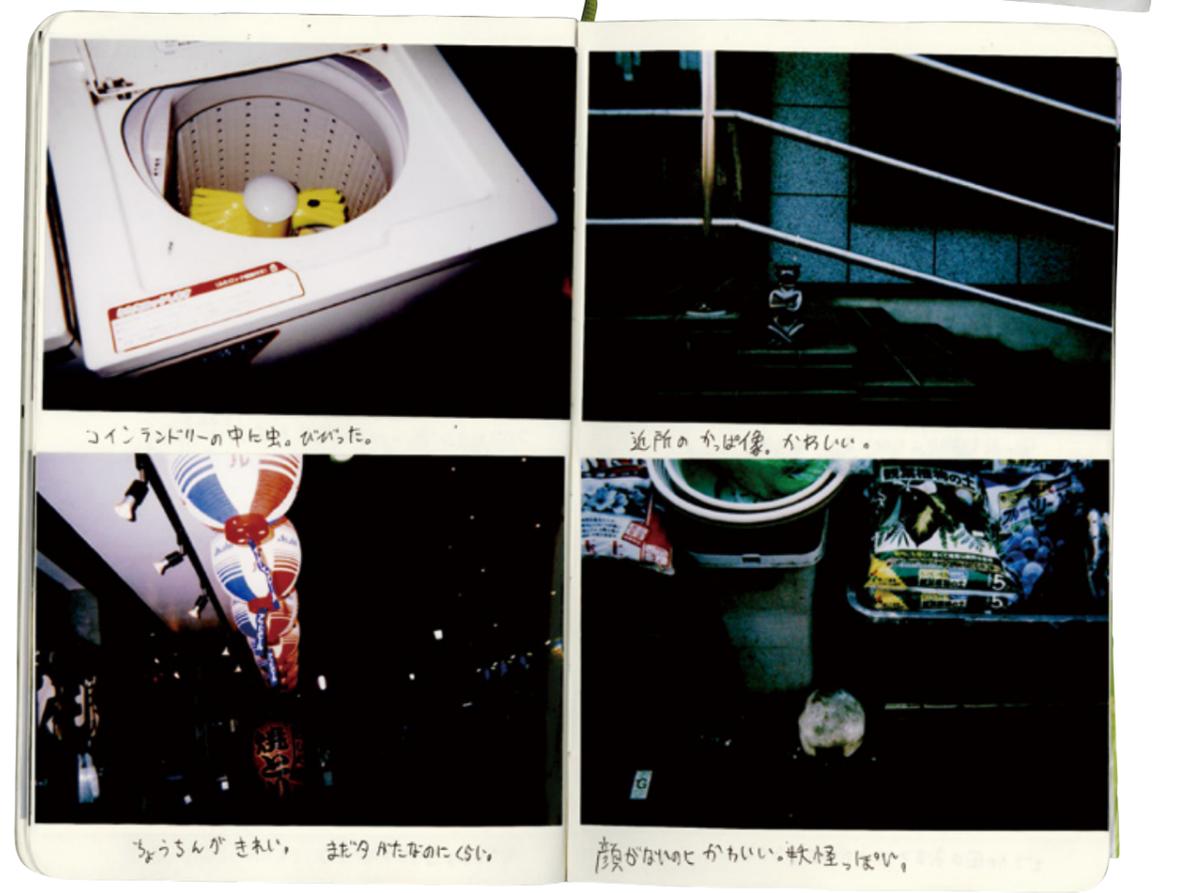
さて、ミッション#01『日常の定点観測』はどうでしたか? 急にフィルムカメラが送られてきてびっくりしましたか? それとも使ったことがありましたか? フィルムカメラの面白いところは、すぐに画像が見れないところかもしれません。タイムカプセルのよう。二十後に開封するタイムカプセルではなく、二週間後に開封するタイムカプセルのよう。さらに、フィルムカメラには撮った瞬間に「いいのが撮れたかも!」って"手応え"があると、いい写真が写っていることが多い。

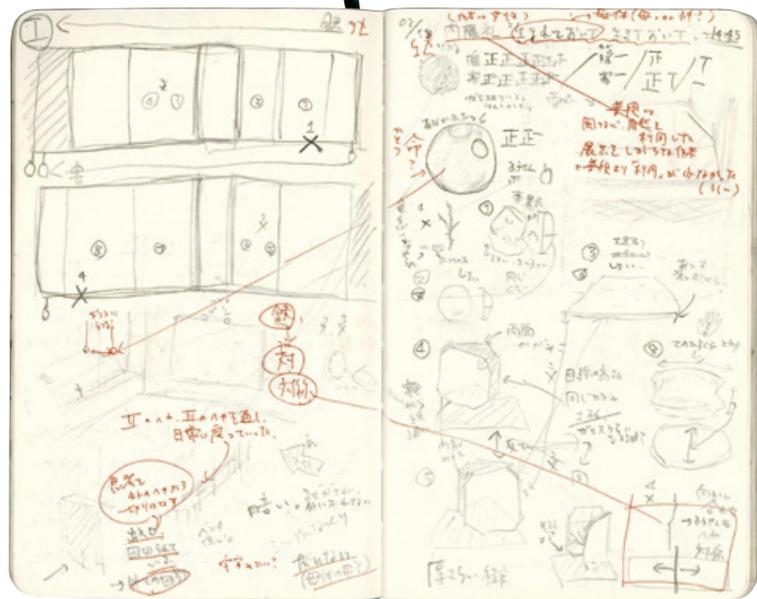
この課題でやってみたかったのは、日常はあなただけのものだということをもう一度認識することです。家族と一緒にいる時間や空間も、友人と一緒にいる時間や空間も、あなたがみている風景はあなたにしか見えていない、あなただけのものなのです。で、その"見方"や"眼差し"があなたの日常を作っています。ささいな日常の美しさや面白さを感じて発見して撮影してみてください。

とても創造性豊かなスペインの建築家アントニオ・ガウディは「世の中に新しい創造などない。あるのはただ発見である。」と話しています。全ての表現は自分の身の回りの観察から始まります。カメラは人にうらやましがられる自慢の写真を撮るためにあるのではなく、自分自身を浮き彫りにして発見するアイテムでもあるのだと僕は思います。おすすめの写真集もぜひ探してみてください。2本目も楽しんでくださいね。

・映画『SMOKE スモーク』
ミッチーが高校生の時にみて、今でも思い出す作品。今回の定点観測のミッションのイメージはこの映画からきています。原作のボールオースターも面白いですよ。映画は有料ですが、よければ、一人でも家族とでもみてください。

・『ははのふた』下道基行
みっちーの作品の一つ。定点観測の作品。



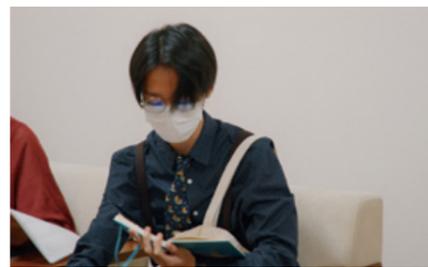


鶯谷だよ! 全員集合!

8月18日(日)
13:00集合 17:00解散

-東京国立博物館
「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」

内藤礼さんの個展を見に、トーハクを訪れた。解説などが全く無いなかで提示される現代アート作品に、塾生は少し困惑しているようにも見えた。しかし、各自での鑑賞を終えて部屋(平成館の講師控室をお借りした)に戻ると、作品に対する疑問や感想をそれぞれがしっかりと持ち帰ってきていた。自分なりの考えと感性によって行う作品鑑賞、そして塾生同士で各々の解釈を共有する場を、じっくり時間をかけて経験する機会になった。(宮下)



ミッション #03

フォーク、スプーン、消ゴム、鉛筆のいずれかがランダムに送られました。

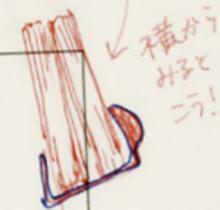
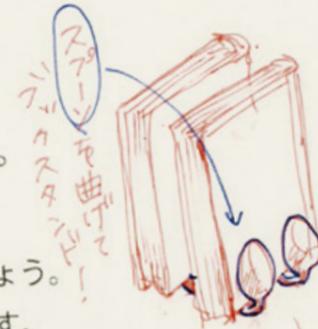
『使い方や意味を捨てる』

同封された物の本来の使い方/意味を一旦忘れましょう。
形状や素材などを観察して、全く別の使い方をしてみて、別の意味を与えて、それをレポート/発表しましょう。

考え続けるために毎日持ち歩くのも良いでしょう。何かを付け加えたり、形を変えても良いです。使えない立体物/オブジェとかにするのは今回はNGです。



これが難しかった...!!



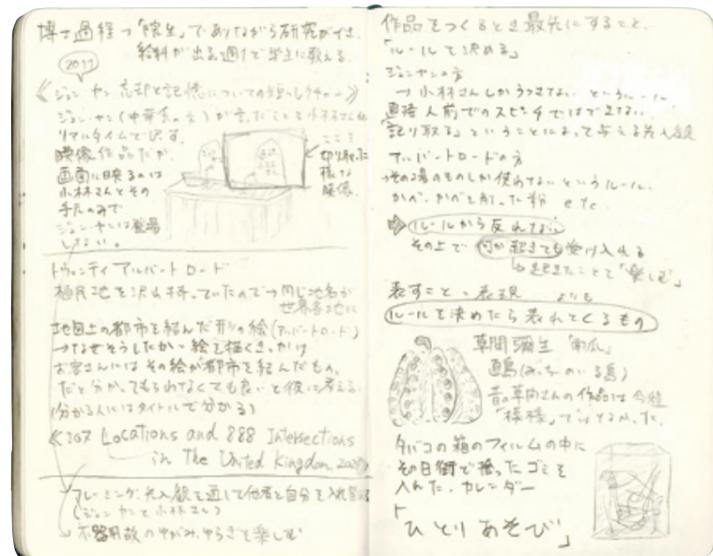
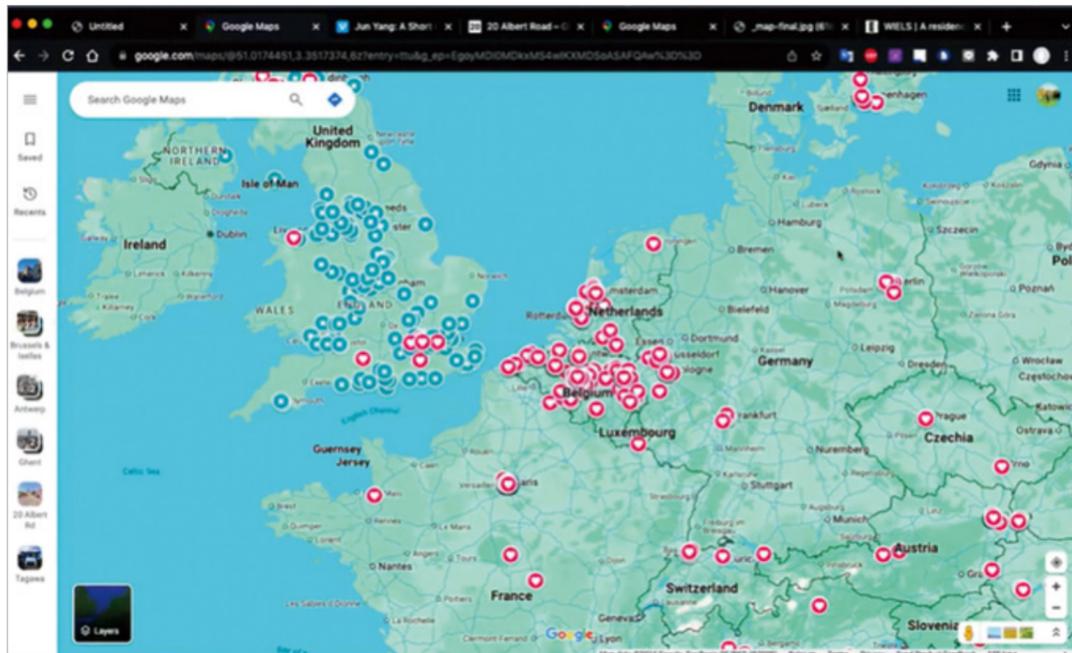
お便り 2024年8月号

いやあ... 東京国立博物館での内藤礼さんの展示、いかがだったでしょうか? 塾長的には、いろんな意味で「くーーーーっ!」うなりました。(みんなの前でも、うなっていましたね) いやあ... 素晴らしい作家です。歌手で言うなら「いい歌声だなあ」と思います、これは好みがあるので、好きではない人もいますが。ちなみに、内藤さんの作品は塾長の住む直島の自宅から歩いて10分のところにもあります。興味のある方はぜひ、豊島美術館と直島、来てください。連れて行きますよ。内藤さんの展示はとてもシンプルだから、難解だと思われがちです。でも、言語ではない脳みそをバカッとオープンにできれば、何かをキャッチできます。(もちろん、彼女はうまい言語の使い手でもあります。) 今回はみんなで感想を共有することで、表現の受け止め方が少し体感できたのではないのでしょうか? 最近、韓国で日本の昔のポップスが流行っているみたいです。言葉はわからなくても伝わること、それは一つの表現の素晴らしさです。いや、言語を扱う表現だって、国や人種をこえます。今回は、展示の後に、みんなで語ってみました。面白かったですね! 楽しいなあ、こういうの。 帰り道に「今日は感想を言葉にできなかった…」と話していましたが、大丈夫、全く問題ない。言葉にするのが得意な人もいるし、感覚的な人もいる。表現者にも両方のタイプがいる。言葉にできなくても、今回のあの展示と会議室で起こった体験/出来事が、心のどこかに残ってくれたら、それだけで嬉しいです。

さて今回のミッションは、同封された物の別の使い方を考えてやってみるミッション。誰も思いもつかないのを、考えてみてね! 柔軟性だよ。恥ずかしがらずに楽しんで! 大丈夫! 新美塾のたかが10人少しの中だけだから、思いついたのを発表してみよう。

・内藤さんのインタビューなど3種類!





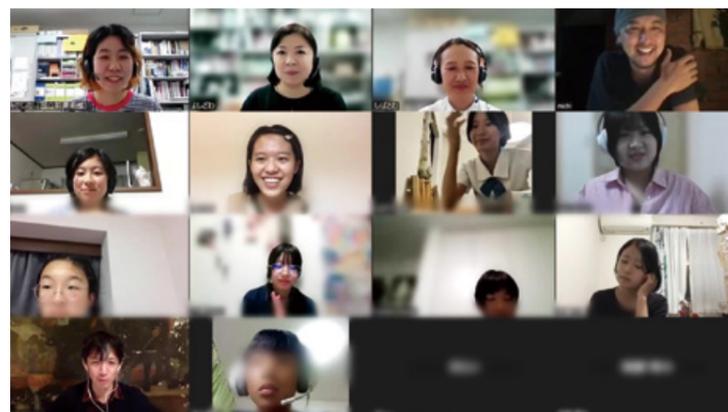
ゲスト・アーティスト
奥村雄樹 (おくむらゆうき)
 1978年青森県生まれ。ベルギー在住。2012年東京藝術大学大学院博士後期課程修了。「私」の不確実性や作者性をテーマとしながら、他者との協働や美術史への言及性が高いコンセプチュアルな作品を制作する。現代美術の作家としての他、翻訳家としても活動。
<https://www.yukiokumura.com/>

スタジオビジット・特別講義:

奥村雄樹氏
 (ベルギー、オンライン)

9月17日(火) 19:00~21:00

第5回のオンライン会では、ベルギー在住のアーティストで翻訳家としても活動する奥村雄樹さんの講義を受けた。第2期までは、オフ会でゲスト・アーティストに会いに行っていたが、今回は初のオンラインでのスタジオビジットとなった。奥村さんは『今住んでいる家や、パソコンの中が僕のスタジオだ』と話していた。オンライン会の翌週、奥村さんは下道塾長と相談しながらミッションを制作。(内容はp.25を参照)。いつもと同じく、塾生には、ミッションの内容は届いてからのお楽しみだった。(宮下)



第3期初の試み!
 ゲスト・アーティストと下道塾長が
 一斉にミッションを考えました。

ミッション #04
 By 奥村雄樹 (現代美術・翻訳)

『厳しいルールの一入遊び日記』

奥村さんが普段考えている問題を中高生に向けて投げかけるような内容のミッションに「やりましょ」

自分で自分にルールを課し、それに従って遊んでみる。
 毎日少しずつ、あるいは、ある日は朝から晩まで、ひたすら。
 使った道具や残った痕跡など「物的証拠」を保存する。
 普段は気づかない自分らしさや他の人との違いが現れるかも。

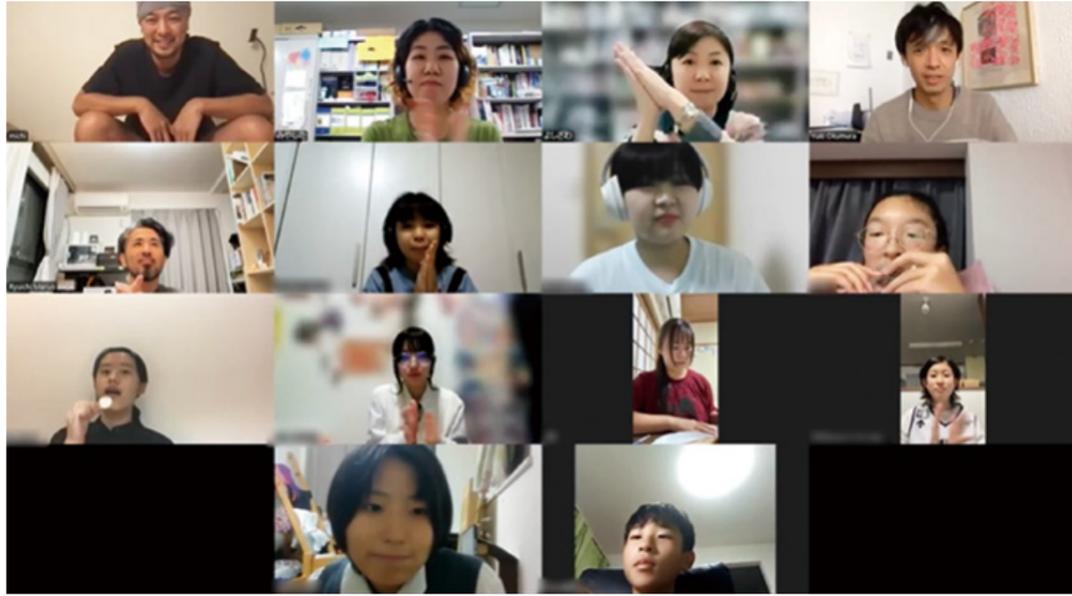
【やり方】

- ①どんな遊びにするか、ぼんやり考える
 - * 頭が空っぽなときに閃くかも。コンセプト、テーマ、目的などは不要
 - * 普段から妙に気になる事柄や、空いた時間になぜか没頭しちゃう作業がヒントになるはず
 - * 単に体を動かすだけではなく、必ず何か道具や素材を使うこと!
 - * 毎日少しずつ続けられる遊びを考えよう。日々の自分の変化が記録されて面白いから。*
 - あるいは、ある1日だけ、何時間も続けられる遊びもOK。
 - ②明確なルールや手順を決める。
 - * 予想外の結果を生むため、偶然の要素を入れよう。
 - 例: 自分の学生番号でサイズを決める、重力に従う
 - * あるいは制限(縛り)を加えよう。例: 利き手を使わない、扱いにくい素材にする
 - * 迷ったら、やりたくて自分がワクワク・ウズウズしてるか? を基準に
 - * 既存の遊びや競技や抽選方式、僕(奥村)が紹介した作品をアレンジ?
 - ③決めたルールをわかりやすく文章にまとめる。
 - * 料理のレシピのように番号をつける。あと、遊びに命名してください
 - ④その遊びを実際にやってみる。
 - * 途中でルールを変えないこと! 最後までやりきる
 - ⑤遊んだことの「物証」を10/8のオンライン会でシェアする。
 - * 遊んでいる様子の写真や動画ではなく、遊んだあとの道具や痕跡など「物的証拠」などを発表。
 - 例: 落書きされた教科書のページ、ひとり缶蹴り(?)でベコベコになった缶
- ★どうしても「一人遊び」が思い浮かばない場合、誰かと一緒にやる遊びでもOK!
 ★質問はラインにどんどん送ってください。(グループラインには投げないでね)

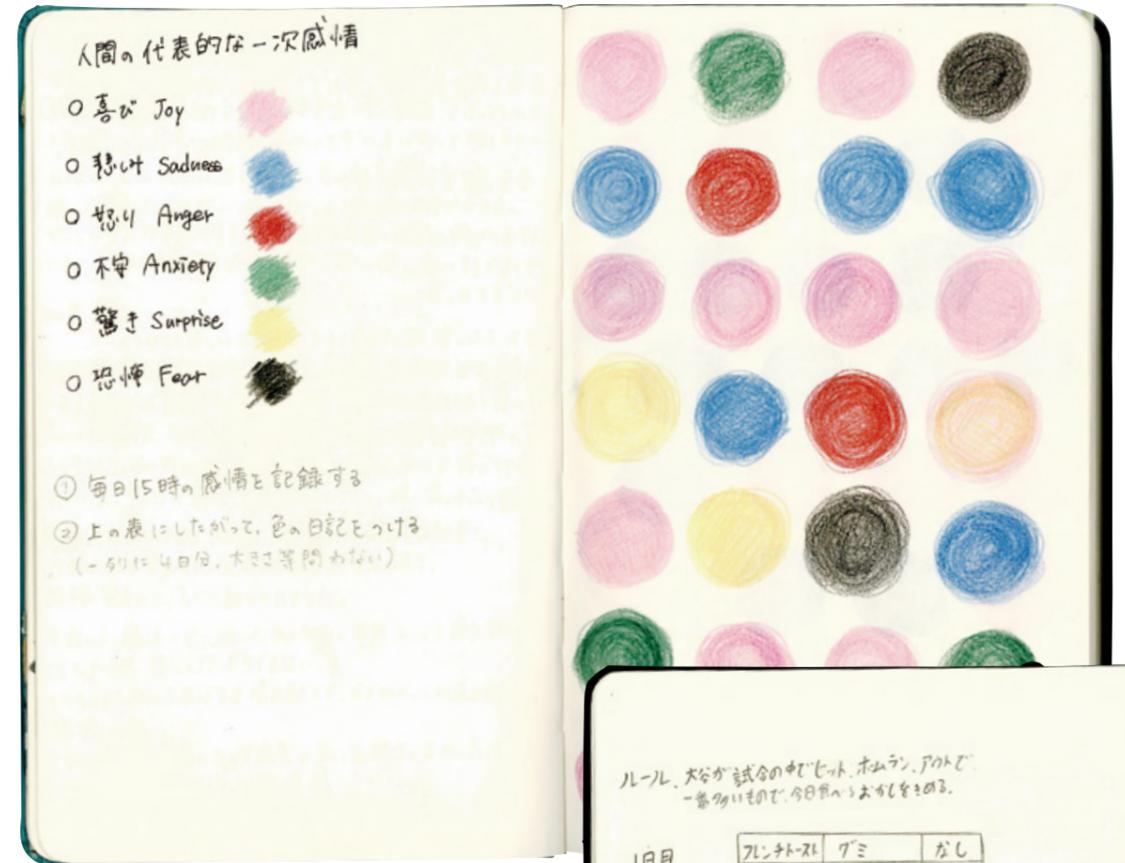
ルールは1つだけじゃ面白くない! 何重にもしかけてあげたい! ...と塾生の遊びをみて、大人たちが気づかせました...

→ 沢山のアイデアを大事!

これは沢山のアイデアで7-7300の形式で実践して考えました。

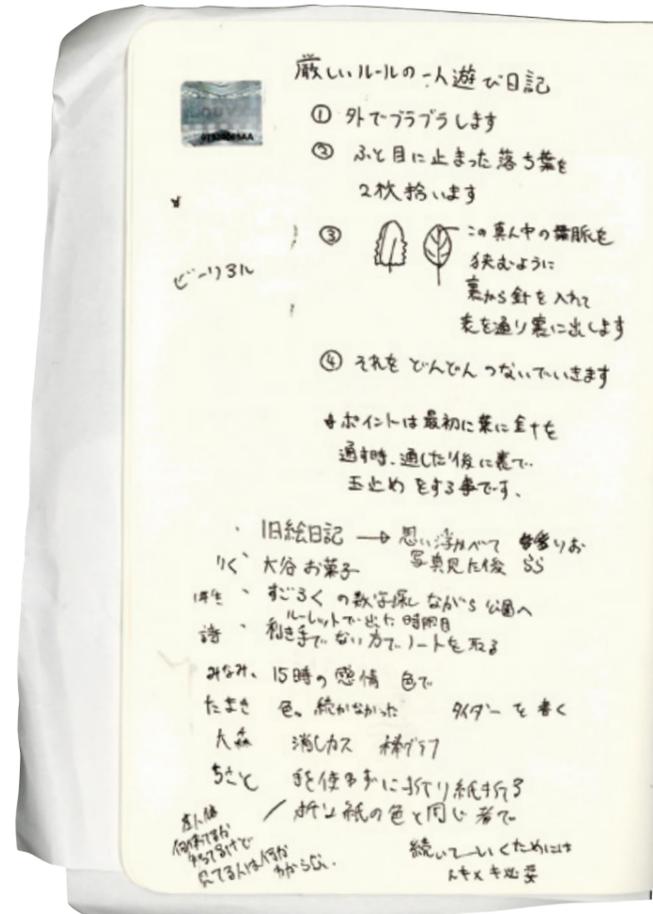
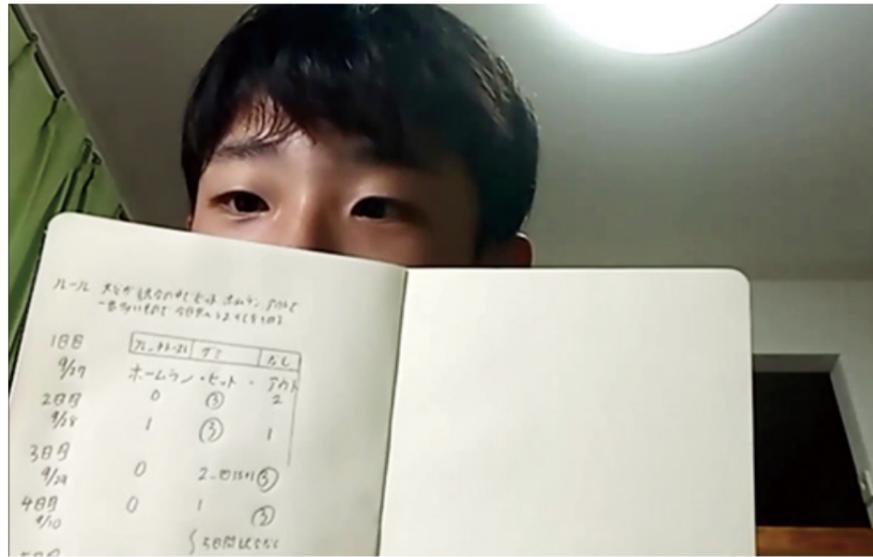


ミッション#04 『厳しいルールの一人遊び日記』



ルール、大谷が試合の中「ヒット、ホームラン、アウト」
一番多いもので、今日勝つよりよいとする。

日	ホームラン	ヒット	アウト
1日目			
9/7	0	③	2
2日目			
9/8	1	③	1
3日目			
9/9	0	2-四球③	
4日目			
9/10	0	1	③
5日目			
10/1	1	1	③
6日目			
10/2	0	0	④



ミッション#04について
10月8日(火) 19:00 ~ 21:00

第6回のオンライン会でも、ゲストに奥村雄樹さんを招き、塾生たちが考案したミッション#04の「一人遊び」について講評をもらった。このミッションは、下道塾長が考える「日常の観察」や「表現」をベースにするミッションと違い、「コンセプチュアル・アート」をベースにする奥村さんならではの内容であり、一見難しそうだが、塾生は楽しみながら取り組んだようだった。自分で決めたルールで「遊び」を継続することで、無意識に自分の個性があらわになるといって、今までにない新しい経験をさせた。(宮下)





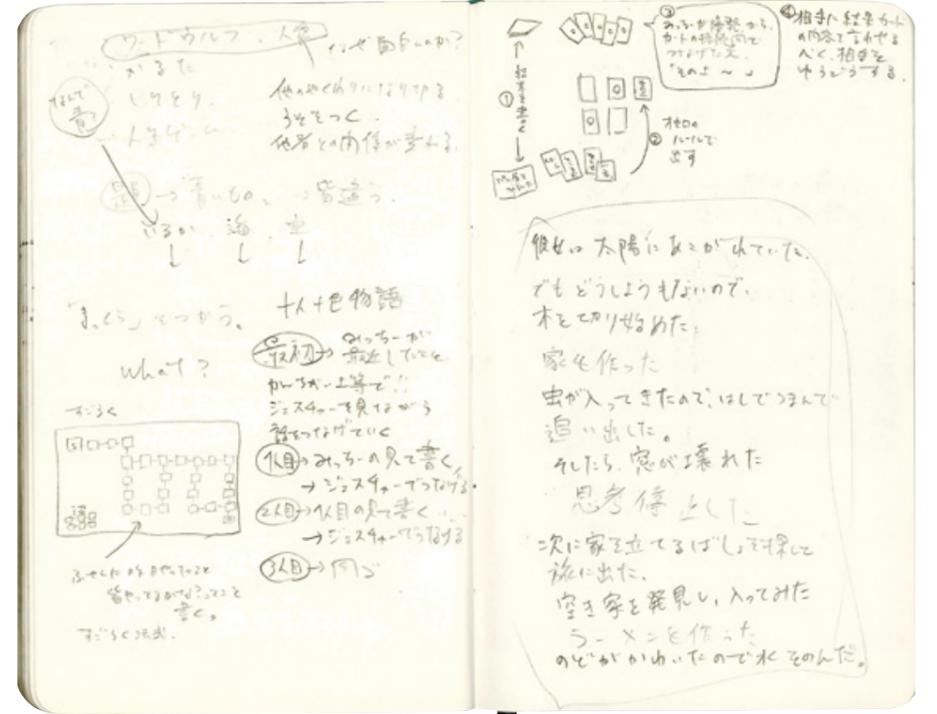
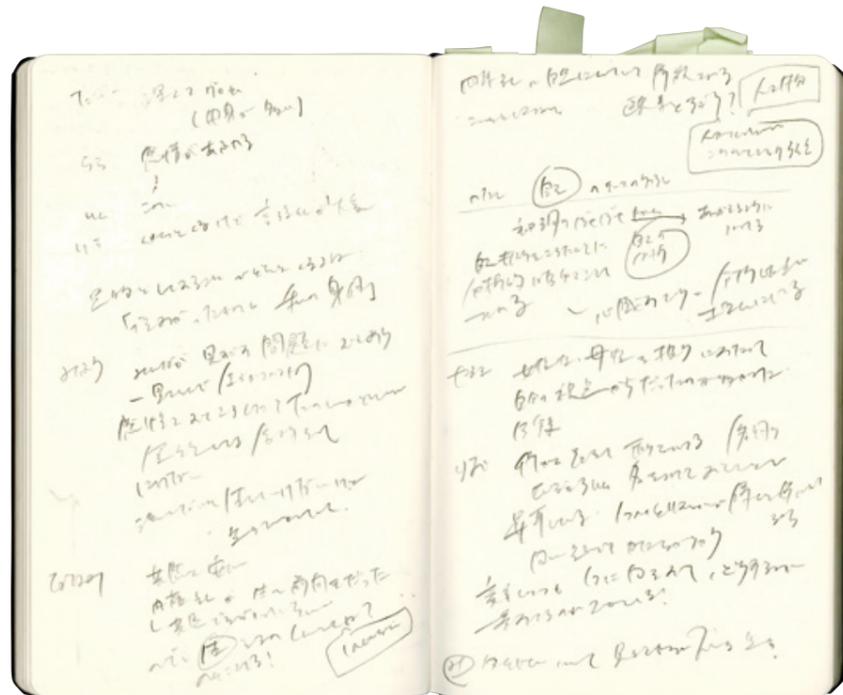
六本木だよ! 全員集合!

10月13日(日)

10:00集合 17:30解散

- 森美術館「ルイズ・ブルジョワ展: 地獄から帰ってきたところ 言っとくけど、素晴らしかったわ」
- ミッション#04番外編グループワーク「みんな遊びを考える」

第3期でも、新美のご近所である森美術館の展覧会を見に行った。ブルジョワ展は、作家自身が作品に寄せた言葉がギャラリーにたくさん掲示されていて、作家の思考について直接的に考えることができる構成になっていた。時に残酷さが垣間見える作品群に、塾生たちがショックを受けてしまわないか…と大人たちは少し心配もしたが、塾生たちはそれらから、表現の力と奥深さをしっかりと受け止めていたようだった。(宮下)



午後は、森美術館から歩いて新美に移動し、多目的ルームに集合した。ミッション#04で、塾生は各自で「一人遊び」を考えていたので、ここでは2~3人ずつのグループに分かれて「みんな遊び」を考えました。ベルギーにいる奥村さんとオンラインでつないで、塾生たちが遊ぶ様子を見守ってもらった。(詳細はp.30の下道さんからの便り(2024年10月号)を参照)(宮下)



ミッション #05

『新しい楽器を作ってください』

見たことのない楽器を考えて、
実際に作って音を鳴らしてください。

がっき【楽器】音楽を演奏するための、音を出す器具。

音楽って何？音って何？

ドレミ…などの音階を鳴らす必要はありません。
何かしらの音を出す器具、道具を作ってください。
そして演奏して聞かせてください。
動画に撮ってLINEにどんどん送ってください。

お便り 2024年10月号

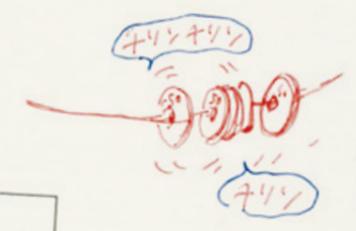
下道部長から、
奥村さんのミッションと講習会の
感想！

奥村くんのミッションが終わりましたね。いやあ〜、新しい体験でした。僕にとって、僕からの感想は、話したのでここでは書きません。でも、ある意味でライバルでもある同年の“アーティスト”に新美塾に入ってもらい一緒に活動することは、僕にとって本当に“学び”の多い機会でした。そして、「六本木だよ！全員集合」はいかがでしたか？ プルジョワ展は頭がくらくなりました。奥村くんのクールな表現とは逆の「心の奥のトラウマのような感情」がドロドロと目の前に現れる、ある意味で“怖い”強い”表現と出会う体験でした。

展示のあと、ワークショップルームで（珍しくワークショップっぽい空気感の中）、みんなで複数人で遊ぶ遊びを考えました。ダニー&タマキの作った遊びはいろんな意味でドキドキハラハラさせられて観客から爆笑が起こり…、オオモリ&リクの遊びは不安定すぎてどんどんルールが変わっていった全員が大混乱におちいる…、ナナミ&チサト&ミフウの勝者も終わりもない演劇のような何か遊び…、そして、最後に発表されたリオ&コナツ&ララの双六と日記をアレンジしたような妙な遊びは、双六感覚でみんなの昨日の出来事を語り合う面白い出来栄で、新美塾！が部室を持ったようないい感じの空気に包まれていて、もっともっとなら続けたい空気が充満していたように思います。

この日のやる事が終わった後に、何人かが「ミッションの後にダラダラ会話できるスペース（オンラインかオフラインか）が欲しい」と提案がありました。これは面白い提案だし、新美塾！の新しい展開だと思うので、それぞれが考えて勝手にやって良いと思う（僕は新美塾の枠内で考えるのも面白いと思うけど。新美塾の外で作るなら、少し報告やフィードバックは欲しい。みんなを信頼しているのでやってみたらいい。）。新美塾！はあと2ヶ月です。はいいね。

きっと、今回、奥村くんのミッションが非常に刺激的になったのは、みんなが各自しっかりと“真剣に”取り組んだからだと思う。新美塾！の外で交流が活発化するのはいいけど、ミッションもあと3つくらいしか出せないから、みんな、それを真剣に取り組んでくれたら、もっともっといういい経験になるはず。今は今しかない。今を全力で楽しもう！



アクションが大事
って言うことか
わかった！

ミッションから塾生に伝えたことがあり、
ミッション#05と#06のあいだは
このお便りが送られてきました。

お便り 2024年11月号

自由と芸術について

鳥で小学生向けの「表現の塾」をやっている。その卒業生の中2の子と鳥のスーパーで偶然会った。彼女は「最近、おじいちゃんにギターをもらったので練習してる」というので、何の曲を弾いているのか聞いてみると、「中学校の校歌だよ」というのだ。そこで、僕はとっさに「僕も中学生の時にギターを父にもらった。でもさ、ギターは自由の象徴みたいなもんじゃない？それで校歌を弾くってどうなの…」と言って、すぐに心の中で「自由」という言葉のいい加減さ／曖昧さが引っかかった。翌日、僕はビートルズの「Black bird」のギター楽譜をコピーして、彼女に渡した。どうやら彼女の母親がこの曲が大好きだったみたいで、喜んでもらえたとし、2ヶ月後くらいにはある程度通して弾けるようになっていた。しかし、校歌よりビートルズは自由なのだろうか？

音楽は元々鳥のように歌いたいと思った人類が始めたのだから、と想像する。いや、洞窟の壁をみんなで叩いてセッションして始まったのか？人間が喋り言葉を持っていて、文字というそれを伝えるための技術はかなり後になって作られたろう。そんな風に、「鳥のさえずりのように」と、音楽を生み出した人間はそれを誰かに伝えるために、音階や楽譜を生み出していったのだろうか。いや、僕はその専門でもないし、あえて、ここではgoogleとかに聞いたりしないで書き進める。

では、自由とは何なのか？表現の自由、というべきか、好きなファッションをきて、好きな歌を歌い、好きな文章をかく、自由。それが無い国もあるし、時代もあった。元々、自由とは「何でもあり」ということなのだろうか？それとも、規則やルールがないことが自由なのだろうか？平日に学校があるから日曜日に自由を感じるように、制服があるから私服に自由を感じるように、でも、学校が大好きで、制服が大好きな人だっている。じゃあ、規則やルールがあるから、自由がそこにあるのだろうか？ファッションのルール、音楽のルール、文章のルール、自由は外側にあるのか？内側にあるのか？

先日、整体に行くとき僕がアーティストだと知って、整体師さんに「アートって何なのですか？」と聞かれた。それに僕はこう答える。「アートを日本語で言うと、美術かもしれませんが、たぶん正しくは芸術だと思う。美術は絵画や彫刻などを指す言葉だけど、芸術はその美術に建築や音楽や演劇などさらにくわえたもの。だから、今日日本人が使っているアートという言葉は芸術だと思うんです。」さらに、「芸術というのは、今は学問のジャンルをさす。学校で教わる他の科目、数学や化学や生物というのは、元々は自然を科学的に解き明かす学問で、自然界の神秘を科学的に証明する。芸術の一つ建築の専門家のアントニオ・ガウディは「世の中に新しい創造などない。あるのはただの発見である」と言ったが、つまり、すでに自然は全ての創造性を持っていて、(科学はそれを解き明かす学問だけれど)芸術というのは、自然界にすでに存在する“美しさ”や“創造性”を人間の手で発見し、人工的に作り出して人に見せる学問なのかもです。」とこんな内容を話した。つまりは、鳥のように歌いたいと思って、やはり人は音楽や芸術を生み出したのではないか。

でも、実は、人間も自然だと思ふ。幼い娘が紙に鉛筆で丸を書いた時の線の美しさ。絵画を学んだ僕がそれに驚く。それは人間が持つ自然。幼い娘の線は鳥のように歌う。それは本能。でもね、人は大人になる。本能は奥の方に追いやられ、忘れられ、すべては「知識」にそして「常識」に支配される。知識や常識を持った大人は、イノセントの子供には戻れない。6歳になった娘はすでに、その線をひけなくなった。少し悲しいアーティストの父。画家のピカソは、めちゃくちゃ絵の上手い人だけど、経験を重ね、老人になってようやく子供のような線を描けるようになったと言っていたことを思い出す。

ミッション#05の「新しい楽器を作る」では、僕はダニーのアイデアが良いなと思った。軽やかだと。でもそれは、ダニーがある意味で“無意識”だったから、良いアイデアを出せたのかもしれない。(ごめん！)そして、逆に、こなつとかが苦戦したのは、それなりに音楽の「知識」があったからだと思うんだよ。りがが今、美術部で絵を上手く描く練習をしているように。多分、他のみんなも、今、「知識」や「技術」をつけて成長していくのが楽しい時期なのだと思う。でも、新美塾！はその逆を行こうとしてるみたいな課題ばかり出すから、みんなしつくりこないのかもしれない。でも、すこし伝わってきた？

本来、学問とは、「知識」や「技術」をつけた者が勝者となるはず。みんなその真っ只中。でも、実は、芸術はそうではない、ことがある。新美塾！はそこに挑戦／抵抗してみたいと思っている。人間の歌声はやはり鳥には勝てないのかもしれないし、ピカソの線は子供には勝てないのかもしれない。

「表現の自由」というけれども、自由というのは「何でもあり」ではない僕は思う。「知識」や「技術」や「常識」を持ちながらも、その先に、それに縛られない脳や身体を獲得すること。自由って何なんだろうねえ……。笑。やはり柔軟性が鍵じゃないかなあと思いつながらミッションを作っているのだが、今回のオン会はどうでしたか？

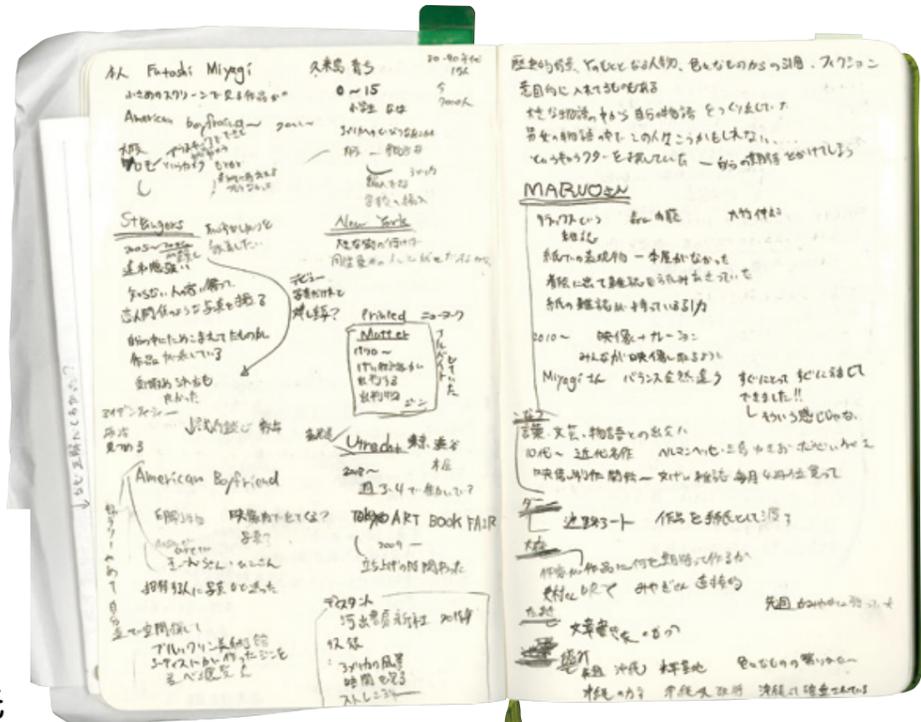
オン会の翌日、京都の徳川に向かう早朝の華津サーブエリアにて、10/30



ゲスト・アーティスト

ミヤギフトシ

1981年沖縄生まれ。2006年ニューヨーク市立大学の芸術学士課程を卒業。自身のセクシュアリティなどのアイデンティティと国際的な社会問題を交錯させた写真や映像を用いたインスタレーション、小説作品などを手掛ける。東京・表参道のブックショップUTRECHT(ユトレヒト)勤務、アーティスト・ラン・ギャラリーのXYZcollectiveの共同代表、多摩美術大学非常勤講師。
<https://fmiyagi.com/>



特別講義：ミヤギフトシ氏

(東京、オンライン)

11月5日(火) 19:00~21:00

第8回のオンライン会では2人目のゲスト・アーティスト、ミヤギフトシさんの講義を受けた。ミヤギさんはご自身の映像作品を塾生に見せてくださった。淡々としたナレーションが付けられた、独特の緊張感が漂う映像の世界観に、塾生たちは新しい刺激を受けたようだった。その後、ミヤギさんと下道塾長とによるミッションが塾生の元に届けられた。小説作品を多く手掛けるミヤギさんならではのミッションになった(内容はp.33を参照)。(宮下)



ミッション #06

By ミヤギフトシ (現代美術作家・小説家)

ゲスト・アーティストとミヤギの
コラボレーションによるミッション、
第2弾です!

『100年後の自画像』

100年後の自分を想像して、文章に書いてみてください。
 文章を書くのが好きな人が多すぎる期間中に
 小説家でもあるミヤギさんからの出題...

100年後、画期的な発明によってこの世界、宇宙のどこかにいるかもしれません。もし、いなくなっても、あなたの痕跡・作品が何か残っているはず。それは、何でしょうか?

迷ってしまったら、Wikipediaなどで100年ほど前のことを調べてみて、現在を中心点として100年先の未来を想像しても良いかもしれません。いろいろ現地でお話しできることを楽しみにしています。ぜひ、皆さんの思い描く100年後の「自分」を文章にして教えてください。

※22日の夜までに、個人LINEで文章を送ってください。発表の仕方は、11月23日のオフ会で「各自読み上げてもらう」予定です。

語り口も世界観もそれぞれ...
 香汗はSF小説のうた
 文章が塾生の数だけ
 生まれ手し=0

例えば、参考までに、表現において100年前に起きたことを少し検索すると...

アンドレ・ブルトンが「シュルレアリスム宣言」を発表しました。シュルレアリスムという美術・文学のムーブメントが100年前に起きました。サルバドール・ダリとカルネ・マグリットが有名かと思えます。日本語だと、「シュール」という言葉にその片鱗が残っているように思えます。宮沢賢治「春と修羅」が刊行された年です。正直、私もいまだに理解できていない詩ですが...印象的なフレーズがたくさんあります。青空文庫でも読めます→

もしくは、時間的に難しいかもしれませんが、100年、という言葉がタイトルに入った本を読んでもみるのも良いかもしれません。

- ・柴崎友香「百年と一日」 試し読み→
- ・ガブリエル・ガルシア＝マルケス「百年の孤独」 試し読み→





表参道だよ!全員集合!

11月23日(土)
10:00集合 16:30解散

- ユトレヒト訪問
- ミッション#06講評

第4回のオフ会では、ミヤギフシさんが働く表参道の書店「ユトレヒト」に開店前にお邪魔して、色々な書籍を見せてもらった。ZINEやアートブックを中心にしたラインナップに塾生たちはみんな夢中になり、ミヤギさんや下道塾長に質問したりしながら、1時間以上を店内で過ごした。その後は、ユトレヒトを出て、いつもの新美の多目的ルームに移動し、ミヤギさんも一緒に、みんなでお昼を食べた。(宮下)

午後は、ミッション#06のみんなの文章を読み合った。ある塾生は自分の創作した物語を音読してみんなに聞かせ、またある塾生の小説はみんなで黙読した。全ての文章を読み終えた後、ミヤギさんは「中高生の皆さんがミッションにどんなふうに応答するのか予想もつかなかったが、感動した」と話してくださった。塾生たちが100年後に思いを馳せながら書いてきた小説は、読む人を100年後にタイムスリップさせるような、不思議な空気感を作り出していた。(詳細はp.39の下道さんからの「お便り(2024年11月後半号その1)」を参照)(宮下)

ミッション #07

『ミッションを考えてください!』

これまでのミッションを参考にしつつ、
自分でミッションを考えてください。
みんなにやってもらいたいミッション! とか
みんなでやりたいミッション! です。

テーマは特にはないです。

みんなが悩んだり楽しんだりしながら
面白い表現が生まれてくるような。
そんなミッションをお願いします。

次のオンラインでみんなを選んで
実際にみんなで作っていきましょう。

どうやってもっと面白くする?
など意見交換もしてほしい。

最後にやってきたり
ミッションに
目撃投票!

→ 今年テーマ無し...!!

ミヤギフトシさんが作ってくれたミッション#06「100年後の自画像」をそれぞれが考えました。
オフ会は、それぞれの表現の発表の場になり、僕はみんなのタイムマシーンに乗せてもらって旅をしました。

自然体で優しい眼差しで未来を見つめるなら、悲観的/否定的な自分の殻を破って生きる意味を掴もうとするななみ、最近自分に起こった悲しい出来事を変えるために10億円かけて現在と未来を行き来したり、情報過多な文章の中に自分の「たまたま」を探すこなつ、小説にトライするもやはり自分に合わない気がするちさと(これはそれで成果だと思う)、体内の小さな世界を想像しミクロとマクロを行き来したダニー、100年後という途方もない時間に思いを馳せ今にたどり着いたみふう、今を全力で楽しむ自分を100年後から眺める大森、言語を使いながら猛スピードで都市を駆け抜けるようなたまき(塾長には意味はわからなかったけど、それはそれで素晴らしいことだと思います)。

自分の発表の回には、全員に文章を読まれて、感想を言い合われ、緊張したり恥ずかしかったり。しかし、徐々にその作者の顔は晴れ晴れとした表情に変わっていききました。
ほとんどみんながはじめてのフィクションへの挑戦だった。本当にそれぞれ、面白くて刺激的な文章で、それら全ての(「耳をすませば」のおじいさんみたいに)「最初の読者」になれて本当に嬉しく思いました。みんな、真面目に自分と向き合いながら、文章に挑戦したからこそ、それぞれ全ての文章にそれぞれの個性が現れていたと思います。

【表現】 心に思うことや感じることを、表に出して現すこと。

それは、恥ずかしいし、苦しいこと。自分の子供を産み落とすようにとても大変な仕事。

小さな島に生まれ自分の性にコンプレックスを持って生きていたミヤギさんは、ニューヨークで表現に出会い、写真表現を使って初めてのカミングアウトをしました。長い間、自分の中に潜めていたものを外に表出させた。それはきっと、とっても恥ずかしかっただろうし、心臓が飛び出るくらいドキドキしたと想像します。
でも、表現をすると、ブーメランみたいに自分に何かが戻ってくる。さらに、自分だけの出来事ではなく、人々を感動させたり、共感を生んだり、興奮を生んだり、さまざまなことがまきおこる。
だから、超一楽しい!と僕は思います。
(でも、もちろん、世の中には、そんなことはする必要のない人たちだけかもしれない。だから無理してやる必要もないのかも。それでも、楽しいと感じる人も多い。他人の表現と出会うのも楽しい!)

奥村さんの表現は、淡々とした毎日に自分の意識しない行動や思考の中に自分を見つけ表出させる。
ミヤギさんの表現は、自分の奥底にある心の声をフィクションにして表出させる。
内藤礼さんの表現は、小さな人工物や石ころなどを組み合わせ、宇宙や自然の揺らぎを表出させる。
ルイズ・ブルジョワの表現は、ミヤギさんとは全く別の個人のトラウマや世界や感情を絵画や立体で表出させる。
ミッチーの表現は、多分、他愛のない日常を観察して、その中から人々の営みに美しさを出させるのが得意。
全ての作家は、美術やアートという競技を競い合うライバルではなく、きっと全く違う研究の道を(誰も通っていない道を)歩む人々。

みんなはこの表現の塾に通ったからといって、みんな表現者にならなくて全然良い。そんな必要はない。でも、きっとこの新美塾!で挑戦した経験の痕跡は未来のみんなに何かを与えてくれると良いなあとそのくらいに思っている。そして、どんどん情報が溢れてくる今に、自分の目や五感で日常や自分(人の表現)を見つめることをもっと好きになってほしい。

ということで、次は最後のミッションになります。

みんながミッションを作る番。

この数ヶ月、毎回、ミッチーが課題を投げてくるから、先生みたいに思えてきたら(僕は先生じゃない)、

みんなが課題を考える側です。考えてくださいね。

任せたい!

ミッション #08

by ちさと

『空想生物標本』

最初のアイデアは
骨格標本「ゴッフェット」
フォット 塾長がアレンジ!

伝説/空想の生き物を作ってください。
図鑑に載っているように、骨格標本や内臓模型など、
図解や説明などを使いながら楽しんで作ってください。

別に詳しくなくても
想像力が溢れるぞ!

ミッション #08

by ななみ

『人間をつくる』

史実を半分混ぜて設定を
書き上げた塾生がいました。
(めっちゃリアルどみんなは混乱!!)

空想上の人間を作ってください。

まるで、その人が「生きている」「生きていた」かのような
痕跡も意識してみてください。

人が信じてしまうようなくらい、

なるべくリアリティがあるように詳細まで考えてください。

wikipedia や伝記のようにそれを表現してください。

絵や文章を
自由に表現
しました

※この2つのミッションは全員挑戦しましょう!

12/15の発表は、それぞれ書いたものをコピーして配ろうかと思います。
ノートの新しいページに見開きで書いてみましょう。何ページでもOKです。

ミッション #08

by リら

『自分を表す形を作る』

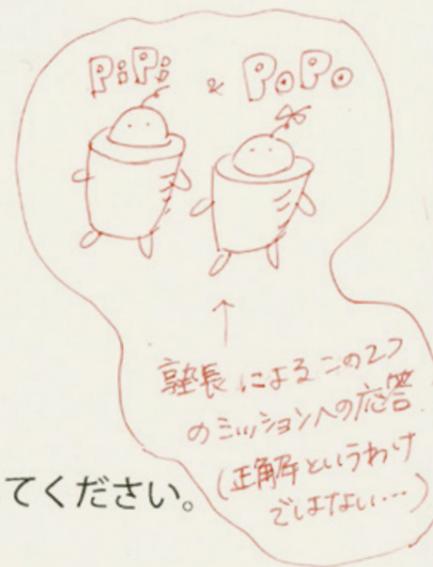
材料はなんでも良いので、自分を表す形を作ってください。

“自分の顔”
じゃないぞ!

ミッション #08

by たまき

『オノマトペ』



ゴッフェット材料は
なんでもOK
かえって面白い...?!

タイトルがオノマトペになる作品を制作してください。

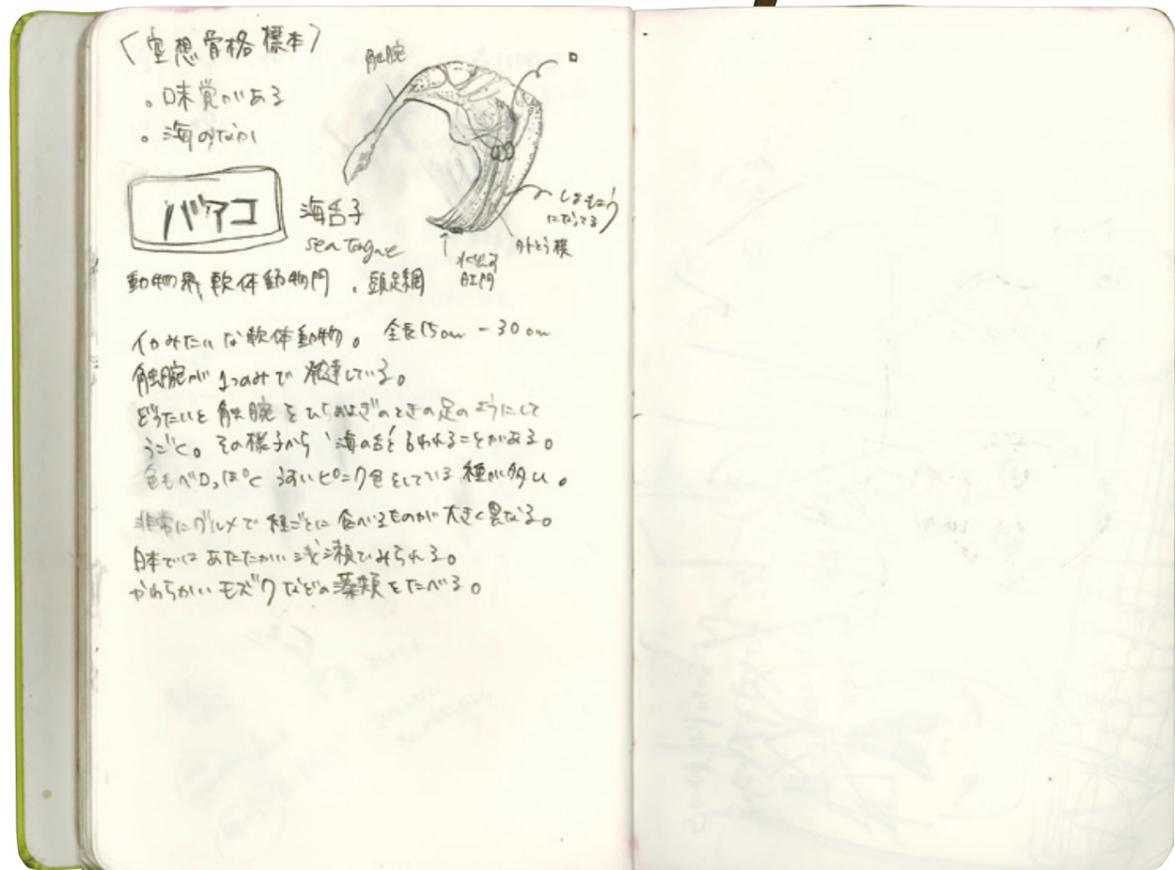
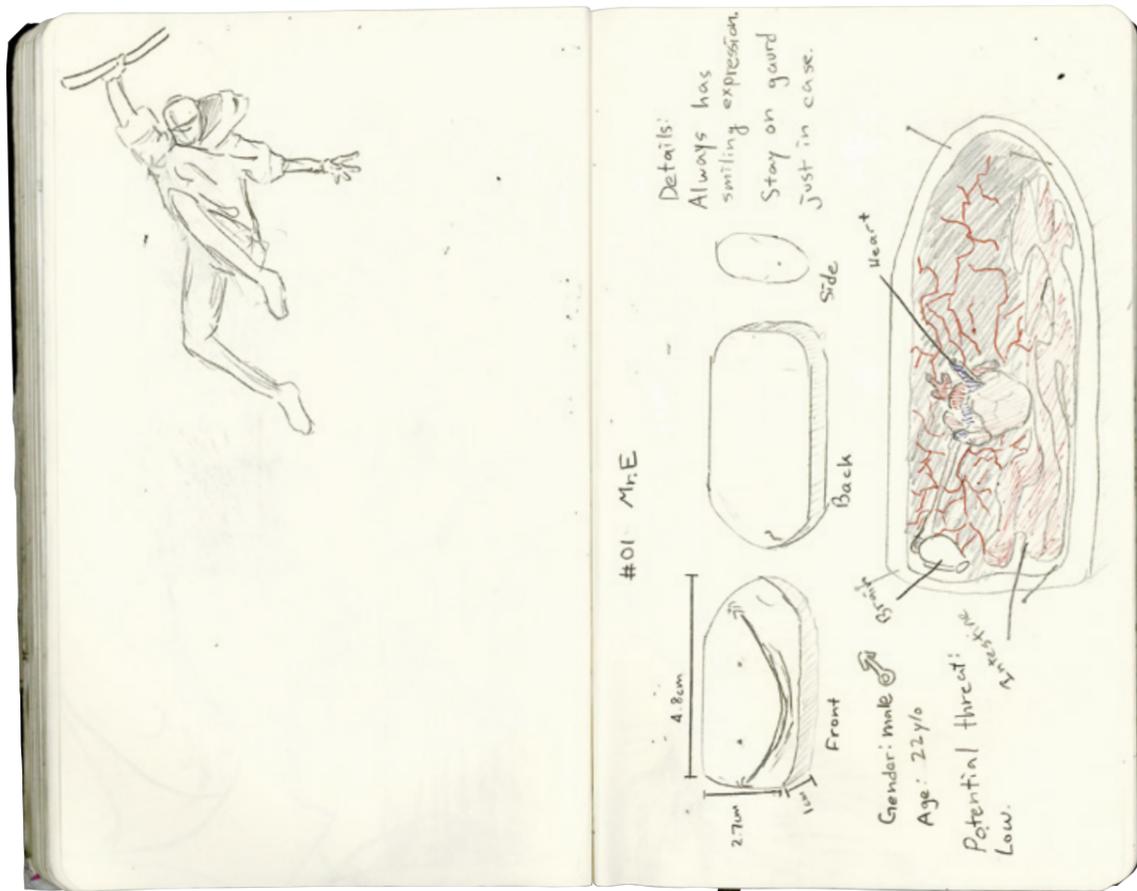
※この2つのミッションは時間がある人はトライしてみよう。
12/15の発表は、やってきた人だけが発表を行います。

(解説がめちゃ
大層なびっ)

お便り 2024年12月号

メールアドレス一覧

氏名	フリガナ	メールアドレス	フリガナ	メールアドレス	フリガナ	メールアドレス	フリガナ	メールアドレス	フリガナ
...



新美塾14 《第5回オフ会》



新美だよ! 全員集合!
(最終回)

12月15日(日)
10:30集合 17:00解散

-ミッション#08講評
-卒業式

最後のオフ会は、塾長、スタッフ、塾生全員(オンライン参加2名を含む)が集まった。新美の多目的ルームに集まり、みんなが手帳に書(描)いてきたミッション#08の回答をコピーして全員に配り、お互いに感想などを共有した。

3期生がみんなで輪になって話し合う機会もこれで最後。そして、新美塾!が第3期で終了することが塾長から告げられた。「これで本当に終わりなのか?」と、大人たちも塾生もあまり実感が湧かず、閉会後も居残ってしゃべり続ける。そんなゆったりした雰囲気での卒業式だった。(宮下)





ミッション #09

『新美塾の半年間』

新美塾はどうでしたか？
みっちーやスタッフに感想を伝えてください。

僕らがこれからもこういう活動をやっていく
エネルギーや参考になりますので。
この半年間を思い出して書いてみてください。
よろしくお願いします。

せっかくなので一つNGワードを作ります。
「楽しかった」という言葉を使わずに、
なるべくたくさんの言葉を使って書いてください。

次の用紙に書いて、
同封した封筒で送ってください。
よろしくお願いします。

※締め切りは1/8（水）までに投函してね
でも、早めに書いた方がよいよー

思わす書きたく
「楽しかった」
半年間 培った表現が
それぞれが語りました。

新美塾!卒業おめでとう!

この半年はどうでしたか? 何を経験しましたか?

もし、それぞれが半年前(新美塾!前)にはなかった新しい自分を発見し成長していたら、僕は本当に嬉しいし、今回も新美塾!は成功だったと言えるな。

まずは、

同封された最後のミッション#09で、新美塾の感想をぜひ送ってほしい。

よろしくお願いします!

ミッション#09『空想生物標本』では、リオがすごいキャラデザ力&ネーミングセンスを発揮(実は油絵以上の才能がここに!?)、さらにリクがさかなクンの頭を解剖。もう一つ『人間をつくる』では、ララが存在しない近所さんを捏造し、チサトのフィクション力とAI(おおもり)力が激突し、どこまでが嘘で本当か、大混乱に陥る状態に! その隅で、ミフウが電柱に生命を与え、フィクションにくすぐられてナナミの暴力性がむくつと起きてきたぞ! 妄想の暴走が止まらない! 気をつけろー!!! と、ミヤギくんの「100年後の自画像」がいい感じにみんなの妄想や表現の爆弾に火をつけたようだね。素晴らしかった!

後半になってようやく、みんなの個性が目前に現れてきて、一人一人の可能性や問題がより見えてきたし、この新美塾がようやく面白い“場所”になってきていた。だからもう半年とか延長できたら、もう少し先まで進めそうだけど、ま…、うん…、こういう終わり方もあるし、これで良いのではないかと思う。

僕は、この半年、いつもみんなのことをぼんやりと考えてて、「どんなミッションを次にやろうかなあ?」とか「前回のミッションは〇〇がついてこれなかったなあ」とか「〇〇がやる気がないのはなんでかなあ」とか「オフ会は〇〇が良い表情をしたし△△は深く思考していたなあ」とか、それはスタッフもそう。新美塾は一人ひとりの塾生と向き合い、それぞれ深い経験ができるように尽力してきた。一人一人の特徴/個性に寄り添いながら、目的地や内容を自由に变化させ、時には塾生のアイデアを形にしなが、表現を通して「学び」「成長」していくプロセスは常に嬉しく、逆に塾長とスタッフは常に頭を悩ましていた。

《アーティスト1人と4人の教育普及チームが、10数人の中高生と半年間向き合い、自由に形を変えながら、表現の学びの場を作る。それを継続させる》

というこの企画は、本当にこれまでに存在しない新しい挑戦だったと思うし、これからもないかもしれない。僕も塾生もスタッフも、大変だったけど、本当に贅沢すぎる時間だったのではないかと思う(←自画自賛)。

僕やスタッフは今回、12月の卒業式を終えた後も、記録集を作るために動き始めるだろう。(さらにもしかすると2月3月に集合がかかるかも??) それは、この企画をここで終わりにせず、ここでの経験やプロセスや手法を記録し、未来のアーティストや美術館などが参考にして新しい企画が生まれてくることも期待してのこと。すでに関係者の中からは「新美塾は本当に面白い!」という感想も聞こえてくる。でも、誰も参考にして真似してくれないかもしれないなあとも思っている。それは、大変すぎるから。笑

(←なんと言っても無料の枠組みで誰にでも開かれ、中高生の放課後の時間に合わせて夕方から夜にかけて2-3週間に1回集まり、時に夜までラジオを全員分収録したり、すごくやりがいだらけなだけで、“常識的な範囲で仕事をしたい大人”はこういう企画は絶対にやらないだろうから、クレイジーな企画だったと思う。

新美塾はコロナ禍という大変な時期(いろいろな行事やイベントがキャンセルになり、自分自身に向き合う時間が増え、考えたり実験をするチャンスが降ってきて、さらにオンラインメディアを手に入れた時期)に、表現を必要とするユースたちとガッツリ向き合う企画として始まった。

本当は10年くらい継続してもっともっと卒業生たちの成長を見たり成果を見たいんだけど、コロナ禍が無事に終わり、中高生も忙しくなり、美術館も僕もさまざまな仕事が増えていく中で、このボリュームでこの熱量で進めていくプロジェクトが難しくなった事実もある。これは言い訳かもしれないね。でも、前向きな言い方をすると、新美の教育普及チームはこの新美塾!の経験をもとに別の形のユースプログラムを絶対に展開してくだらうし、僕もこの経験をもとに別の地域や国で中高生の美術や表現の学びと向き合っていくことは継続するだろうし、タイトルや形は変わりながら残っていくとも言えるだろうね。

このユースプログラム新美塾!は、美術館としては、これまで関わりが少なかったユースが美術館に興味を持ち展示を見たり関わってほしい気持ちや、地域の人々に美術館を活用してもらおうことなどを目標にしていたと思う。僕の勝手なモチベーションとしては、2014年あたりから、「14歳と世界と境」というプロジェクトをやっている、日本全国や韓国や台湾や香港、フランスなど世界中の中学校の美術の授業にお邪魔して日常観察のワークショップをやっていた中で、「数時間の関わりでは面白いことができないなあ、もっと深く関わってみたいなあ(実は僕は中高生に美術を教える教員免許を持っている!が、実際に中学・高校の先生になる仕事の選択はなかったし)」とっていたこと。さらに、2018年に娘が生まれてきて、育てることや教育に関わることへ興味が増えたこと。さらには、北海道の小中学校とコラボをすることになり現地調査に行った時にコロナ禍で学校教育がいろいろなイベントやできないことが発生してさらに学校へ行けない子も増えている現状を知って自分何かやってみようという気持ちも湧いてきたこと。などなどなど。そんな個人的なモチベーションと美術館のモチベーションが合わさって、さらにコロナ禍という時代に向き合った3年(構想も入れると4年近く)だった。

あー、終わった!!!

いやいや、終わったのか????

この経験を持って、人生はまだ続く。

だから、新美のユースプログラムも、僕の教育との関わりも、塾生の進路も、全てがこの先へと進んでいく。

楽しみでしかない。

多分、100年後にはみんなほとんど何にも残らないかもしれないよね。

だから、

今を楽しもう!

参加してくれた塾生たち、本当にありがとう!

そして、背中を押してくれた保護者の方々もありがとうございました。

スタッフもお疲れ様。

これまでの卒業生から、進路相談を受ける事はあるので、なんかあったら僕やスタッフに相談してね。

あと、直島も卒業生がよくくるので、ぜひ遊びにきてください。

ではまた、お元気で

あー—————、楽しかった!!!!!! 笑

卒業式の翌日 島へ帰る電車にて
塾長 みっちー



プロジェクト「14歳と世界と境」

塾生の感想から

新美塾は考えた事を「実行」できるのが、私にとってとても嬉しかった。普段考えるだけにしてしまう事を実行して反応が返ってくるのは、怖いことでもあるけれど、新鮮だった。美術館に行く時に「作品」だけでなく、「作品」を作っている人がいるのだと感じられた。「表現」という言葉には、なんとなくうさんくささを感じていたけれど、表現することは自分を元気づけてくれるのだと気付いた。それに、自分が表現した事は相手に伝わるのだと思った。

応募したきっかけは、もっとアートを学びたかったからいろんな教室を探していました。そこで親が新美塾を探したんです。正直、私は油絵とかを学びたかったので、そんな期待はしなかったんです。だけどお父さんが美術は考え方も大事、技術だけではない。なので新美塾に挑戦してみたんです。まさか当選できるとは思いませんでした。完全に過小評価していました。この半年間でいろんなことを学び、いろんな経験をし、新美塾の見方が180°回転しました。それぐらい新美塾はすごかったんです。

普段絵を描いているけど、それも美術の要素の1つにすぎないんだと奥村さんのミッションで思いました。現代美術。なんとなくイメージはわくけど、それを0からうみ出す。なんだか難しく考え

すぎしてしまう。自分はなんで美術をやっているのかをもう一度考えました。なんで大学行ってまで学びたいのか。それはきっと自分の絵を、作品をつくる場所と作品をつくる正当性がほしいから。それって本当に美術？自分の中

にある好奇心とか将来とかを色々考えるようになった。だけどまだ答えが1つも見つかっていない。新美塾の半年間で興味とか価値観とか、色々広がったように感じます。でも半年じゃ結論づかないことばかりで、自分の中に人生のミッションがたくさん出来ました。本当にあつという間だった半年間。短かったけど、やっとスタート地点に立てたという感じがする。今までやってきたこと、今やりたいこと、将来、全部ふくめて自分だと思ふ。その中でうま

れる自分らしさ、自分。分からないけど分からないなりに考えてやってきたこと、新美塾で学んだこと、きっと意味があると確信しています。でもまだここで新美塾はおわりじゃない。また10年後に会うときまでに絶対に何か見つける。

自分は、初めてこんな長い活動をしていろいろなことをまなべました。最初のオフ会では、六本木駅でまよったりしたけど、3回目のオフ会で、だんだん東京に行くのになれてきたりもしました。ほかにも、インスタントカメラのミッションなどでは、写真を撮ったりして、現像した写真を見つみるとスマホで撮るとちがって、すごくエモく感じたりしました。ほかにも、どの角度で撮れば、綺麗にとれるのかなどを考えたりして、撮ってみても逆光などでうまくとれなかったりして、そういうところもインスタントカメラの、魅力だと感じました。

私はこれまで美術館に行く機会があまりなく、行ったとしてもどのように鑑賞すれば良いのか分かりませんでした。しかし、オフ会でみんなと現代アートを鑑賞し、感じたことを手帳に書き留めて、みんなと感想を交換するという体験はとても新鮮でした。みんなのおかげで、アートに関する視点が広がりました。次に手帳に自由に記録する良さに気づきました。自分が考えたことや、行った映画や乗った電車のチケット、デザインが良いなと思ったパッケージ、思い出の品などを貼り付けて記録しました。今後も続けたいと思います。このプログラムに参加したことで、学校では経験できないような成長を感じました。学校での生活だけではこんなにアートや表現に対して興味を持つことは難しかったと思います。



自分と全く違う育ち方で、全く別の視点や意見に刺激をもらえました。興味深かったです。オンライン会やオフ会も良かったです。現役アーティストさんと会ったり話をきいたりするのは初めてでしたので。展示も見に行けたことがなかったです。今年は「初めて」が多い年でした。申し込んで良かったなと思えたので個人的には成功かなーと思います。

今まで表現って、「にじみでるやつ」か、「暴力的にあらわしたいこと」の2パターンしかしなかった。だから、前ズームで話したかもだけど、私の所有が増える、と、表現する、がイコールだった。でも、毎ミッションみんなとつって見せ合っていくうちに「なんかおもしろ〜!!」っていう直感がどんどん強くなって つくるときもその直感をたよりにしはじめてた!この半年、日記を書く頻度が下がったりと失った感覚たくさーんと思ってたけど、得た感覚もあるね。老い〜

新美塾での感想がうまくまとまって出てこないくらいには 私のまわりは表現でいっぱいです!!ありがとうございます!!!!みる側としても、つくる側としてもいっぱいえいきょうを受けたし、えいきょうをうけて与えてをためらいなくできる新美塾のあのかんじがすごく好き、こんな場ができるの本当にすこいみわからない!!♡いつも思っていました。いつか表現したくなったとき、表現できる人になりたい、なってるといいなと思います。

たまきと9月?ごろに話していたことがあったのを思い出して、まとめると、現状って作ったものをだして結局はその評価?フィードバックをまつだけだね——というような話だった気がする。すごくマイナスな話ばかりになっちゃったな。たぶん、わたしが新美塾に対してすごく不完全燃焼なんだ。でも私は半年新美塾にいてよかったと思う。ものをつくる人のまなざしを見られた感じがしたし、自分がそういう柔軟さがなくて気づけた。柔軟さは学校で教えてくれるものではなく、そういう場所が世の中に存在しているってすごくすてきなことだと思っている。(よその美術館のユースプログラムは学術方面のものとか1日単発で、そのときの企画展と関係あるものを中心なのでこの形態はめずらしい他で得られない自分の新しい面と欠けへの気づきがあるので良い方向性だな、と思う。) さっき新美塾との関わり方がさいごまでつかめなくて不完全燃焼だったと書いたけど、不完全でなんとかした

い!と書いていろいろ考えているうちに、ミッションが上手にできなくて、うーんと頭をひねっているときに自分と向きあう時間になっていた感じがする。それがさっき書いた自分の欠けが見えたっていうところにつながってくるかも。

ミッションを見た後、やってみる時間、オンライン会が終わった後、オフ会の帰りの電車の中で、世界が違って見えました。やっぱり世界って捨てたもんじゃないなと思いました。深く思考するからその分疲れるけど、同じくらい元気になれました。私は人と関わっていて心が荒んでしまうことも多かったけど、不思議とこの場所ではそういうものがない。異なる人と生きるって当たり前だけど、共通点や共感が大切にされている世界の中で、本当にバラバラで私と全く違う人たちと、こんなに仲良くなれて、繋がることのできるんだ!と、いつも感動というか感激というか、それに近い感情がありました。新美塾!が始まった頃、たぶんこの期間の前半はずっと、心の中に諦めかけた自分がいて。みんなの考えること、ミッションに対する返答が本当に面白くて、自分は向き合うことすら放棄していた気がして、すごく悔しいです。恥ずかしい、とか、「変」って思われなかな…とか。常識とか正解に気を取られたまま、何となくで流れてしまった。でもだんだんと自分の心を、ぱっと、自由にする感覚?というか、怖さを一旦捨ててみる、ということができるようになった気がします。そうしたら、私のアウトプットにみんなからの予想外の言葉が届いて、本当にときめきました。自分の感性を信頼できていなかったんだって今は思います。本当は好きなものも言いたい言葉もたくさんあったのに、それをする勇気がたりなかったんだな、と。新美塾!のおかげで私は確実に変わったし知らなかった感覚に出会えたし、もしかしたら一生出会えなかったかもしれない人たちと繋がることのできました。きっと新美塾!がなかったらアメリカ留学も考えずらなかつたと思います。実はずっとアメリカだけは行きたくない、と書いて。でも、違う世界、見てみようと思って。そういう勇気が今の私にはほんの少しだけあります。新美塾!で違う世界を見る面白さを知れたから。世界、捨てたもんじゃないじゃん!って思えたから。自分の感性を、信じられるようになったから。新美塾!のおかげです。



卒業後の保護者のアンケートから

質問事項 (全10問から抜粋)

- ① 応募を決めた理由、新美塾!に期待していたこと
- ② 満足度(選択問/5段階)
- ③ 質問②の回答の理由
- ④ 参加後のお子様の変化
- ⑤ 全体への感想・要望

回答

- ① わかりません
- ② とてもよかった
- ③ 毎回楽しそうに取り組んでいました。
- ④ また絵を描くようになったみたいです。
- ⑤ 娘がとても楽しいと言っていました。貴重な機会をありがとうございました。

① 今までにない試みだと思いました。絵の見方の塾でもなく、絵の描き方の塾でもない。募集告知ムービーでの塾長さんの雰囲気娘がこの先生に会ってみたい!と。娘は4歳上の兄の影響でデジタルな創作活動はしていたのですがどうも自分の居場所ではないと思っているような、そんな雰囲気だったので新美塾で何か自分の好きなことをみつけられたらいいなと思って送り出しました。

- ② とてもよかった
- ③ 今までで一番楽しかったそうです。日々の中に発見がいっぱいあったと。年齢によって見るものや考えの深さが違うんだな、など気づきが多かったそうで。最年少で参加したので高校生の自分で参加もしてみたかったとも言っていました。
- ④ ミッション、でたときにはうまく思いつかなかったのにあとになって思いついてやってみたり生活の中で、あ、これミッションにできたじゃん!など、まだまだ〇〇(塾生の名前)の中で新美塾!してるようです。フィルムカメラを欲しがったり塾長の住むエリアのニュースを聞く目と輝かせたりいろんな変化をいただきました!



⑤ 本当にありがとうございました。終わってしまった親子共々寂しい!ですが、2034年の約束を聞いてなんて浪漫があるんだー!と。みんなでまた再会できる日を今からすごく楽しみにしているようです。(数日前も歯を磨きながら突然、2034年の12月の…楽しみだ!とか、言い出したりしてます)またこのようなイベントに参加できたら嬉しいです、国立新美術館は特別な場所になったようです。本当にありがとうございました。

- ① 今年になって毎日絵を描くようになり、また色々な美術館に行き作品を見ることが多かった為、さらにアートに興味を深めて欲しかった。
- ② とてもよかった
- ③ 自分で考えて、生み出す・創り出すことをしてほしかったので、課題はとても良かったです。
- ④ 他人と違うことや、違った視点からの物の見方をできるようになった。
- ⑤ 半年もやりきれぬのか初めは不安もありましたが、一回目から楽しむことができ、あっという間に終わってしまった今は寂しいくらいです。塾長はじめスタッフさんのサポートには感謝しています。年上の塾生の皆さんにも優しくしていただけてとても良い経験になりました。ありがとうございました。



- ① 美術館で娘と一緒に昨年の発表展示を偶然見て、娘が興味を持っていたので。見てから応募まで時間が開き、動画の応募もかなり迷っていた風だったので、本当に参加するとは思っていませんでした。(本人は選ばれたと、とても喜んでおりました)好みも分かれると思っていたので、合わなければすぐやめてもいいのでは、と話していました。特に期待してる事はなく…娘がどう反応するかな?とは思っておりました。(と書きながらも、娘とはよく美術館等に行っていたのですが、親や学校以外の方々とも共有したり作業する機会はとても貴重だと思っていました)
- ② とてもよかった
- ③ 初日から、とても楽しかった!と次を楽しみにしており、いつまで続かな?と心配していましたが、時に悩みながらも、最後まで楽しみにしている様子で、いろいろと話を聞かせてくれ、私も楽しかったです!アーティストの方々はじめ、同世代の参加者さん達からも様々な刺激を受けたようです。
- ④ 変化…、忙しい日常の中で、学校以外の世界、視点にも目を向けるようになったのでは、と思います。ありがとうございます。また先日、サンデグジュベリ(星の王子さま)のドキュメントを流し見していた時、おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。)」というフレーズが流れ、「これ、新美に行って、本当にそう思ったの!!」と娘が言い、少し驚くと共に、とても素敵な体験をさせていただいたのだな、と嬉しく思いました。
- ⑤ みっちーこと下道基行さん、スタッフの皆様、本当に貴重な時間をありがとうございました!!大学生など専門分野でのワークショップ等が多いと思いますが、中高生での長期での機会はあまりなく、中高生でしか出来ない体験、思考をさせて頂いたと思います。特に下道さんが、子供に寄り添って下さったのが、アーティストさん、という壁?を全く感じないでいる娘の様子に、素晴らしいな、と感銘を受けました。娘の人生に影響のある半年だったのでは、と感謝の気持ちでいっぱいです。また国立新美術館の展示や、下道さんの作品にも出会えることを楽しみにしています!!本当にありがとうございました。

- ① 国立新美術館で新美塾のノートの展示をみて、皆で一つのテーマに取り組みながら個性や特性を知ることができるのではないかと、学校以外の友人、先生と出会う良いきっかけになると期待して応募しました。

- ② とてもよかった
- ③ 積極的にテーマに取り組み、生き生きと様子を話してくれる姿からは、日々の学校生活とは違う一面を知ることができた。
- ④ 学校以外の活動で、新鮮で楽しい活動ができていた。違う学校の同世代の友達ができてよい刺激を受けたと思う。
- ⑤ 親子でもっと長く新美塾で活動したかったねと話している。半年といわず、一年でもいいと思う。せっかくできた友達とも卒業後も定期的に同窓会のような集まりがあると関係が続いていいのではないのでしょうか。良い先生と友達にめぐられました。どうもありがとうございました。

- ① 本人が決めて応募したのでよく分かりませんが、わくわくした様子だったので沢山の刺激があったら嬉しいなと思っていました。
- ② とてもよかった
- ③ こんなことがあって〜と、楽しそうにしていたので良かったと思います。
- ④ 普段、ただ過ごしていたらお会いできない方達と、出会えたことと一緒に何かをした経験が、娘には宝物のようになったと見ていて思えます。
- ⑤ この企画に応募したいの!と言った日から、沢山考え、沢山刺激をいただいたようです。チャレンジする機会があることがとてもありがたかったです。今後もいつか集まる機会があれば親としては嬉しく思います。ありがとうございました!





「NACT YOUTH PROJECT 新美塾！」とは何だったのか？

—— 美術館のユースプログラムを考える

2025年3月15日（土）

13:00～16:00

国立新美術館 3階講堂

登壇：

下道基行（新美塾！塾長）

吉澤菜摘（国立新美術館 教育普及室 室長）

真住貴子（国立新美術館 第一企画室 室長）

新美塾！の3年間の取り組みをより広く周知し、また、塾長や新美のスタッフ自身が新美塾！のユースプログラムとしての活動の意義を考察するため、トークイベントを開催した。イベントは二部構成で、第一部では新美塾！がつくられた過程と3年間の活動の様子を、登壇者3人のそれぞれの視点から振り返った。第二部では3期生の新美塾！についての感想（詳細はp.50-51を参照）と、1期生と2期生、その保護者の方々へ、新美塾！卒業後の様子について尋ねたアンケートの回答内容（詳細はp.62-65を参照）を紹介した。トークの会場には卒業生たちが集まって囚らずも同窓会のような状況になり、彼らが手を挙げて、塾長に質問や感想を投げかける場面もあった。ユースの生の言葉を共有することで、新美塾！で何が起っていたのか、トークを聴いている人々も実感を持って考える機会になった。（宮下）



美術館とアーティストが
新しい表現の学び舎の3年間...

NACT YOUTH PROJECT
2022-2024

新美塾！
とは何だったのか？

—— 新美塾！の3年間で振り返りながら
これからの美術館のユースプログラムを考えます

日時：2025年3月15日（土）13:00～16:00

会場：国立新美術館3階 講堂（港区六本木7-22-2）

参加費無料／定員200名（当日参加・先着順）

※時間や内容は都合により変更となる可能性があります。
最新情報は国立新美術館ウェブサイト「イベント」ページよりご覧ください。



詳細、最新情報はこちら

出演：下道 基行（写真家・美術家／新美塾！塾長）

吉澤 菜摘（国立新美術館 教育普及室 室長）、真住 貴子（国立新美術館 第一企画室 室長）

国立新美術館が開館15周年の2022年に立ち上げた、13歳から18歳までのユースを対象とする教育普及プログラム《NACT YOUTH PROJECT 新美塾！》は、2024年度の活動を以て一度終了することとなりました。このトークイベントでは、塾長を務めたアーティストの下道基行氏を迎え、新美塾！の3年間の活動を振り返ります。表現のスキルを磨くのではなく、活動を通してユース達が自ら考え、将来を選択する力を伸ばすことを目指した新美塾！は、各期の塾生の人数を約10名に絞り、半年間のあいだ、1～2週間に1回は何かイベントがあるという、非常に密度の高いプログラムを構築してきました。下道氏と国立新美術館スタッフが見てきた、この表現の塾での中高生たちの成長を皆様と共有し、美術館が行うユースを対象とした教育普及プログラムの意義を考える機会としたいと思えます。

《NACT YOUTH PROJECT 新美塾！》は、株式会社小学館にご支援、モレスキン ジャパン株式会社にご協力いただいています。

3人のトークから



下道 こういう活動の成功を測るってすごく難しいと思うんです。10人がすごい経験をして、すごく良いリアクションがあって、僕はすごい手応えがあるんですけど…。「この展覧会、何万人入りました！」っていう評価をしている場所（美術館）で、新美塾!の「10人がめっちゃ成長した！」っていう成果は、どうやって評価されていくんだろう?と思います。

真住 「もったいない」という言い方をされてしまうことはありますよね。でも、「広く浅く」ではなく「深く狭く」やるという選択をしたプログラムの宿命かもしれないです。

吉澤 新美塾!で経験できるのは10人だけですが、この形が当たり前になって、新美以外の美術館でも新美塾!みたいなことが始まっていけば、経験できる子の母数は増えていくと思います。



下道 ずっと、「新美塾!」っていう、場所を作っている感覚でした。新美という場所を使っても良かったはずなんですけど、コロナ禍に始まったプログラムということもあって、新美塾!は新美をあまり使わない形になっていった…それなのに、最終的には場所をつくっていくことになった…というのが独特だったって感じします。

吉澤 実体としての場所には、こだわらなかったですね。



吉澤 新美はコレクションを持たないので、元々、所蔵品によらない教育プログラムを実施してきました。実際の場所がなくても、コミュニティは作れると思うんです。例えば、オフ会の移動中、バラバラに分かれて話しながら歩いている時間が、「居場所に居る」という感覚を構築してきたのではないかと思います。こういったオフ会の移動時間のようなことも含めて、プログラムになっていたのだと思います。教育の活動は、美術館という箱にこだわらずにできるものだと思います。



真住 新美塾!は新美の活動を見て欲しいという視点ではなく、塾生と関わりながら作ったプログラムでした。様々な個性を持つ子達とミッションを通じて彼らが自分らしさを出せる場になれたのではないかと思います。

下道 本当にみんな、バラバラな方向を見ていたから、ミッションを投げかけることでそれぞれの引っ掛かりを見つけていこうとしたつもりでした。



トークイベントの当日限定で、新美のパブリックスペースで、新美塾!の活動の様子を紹介する展示を行った。1階のロビーには、第1期と第2期の記録動画や「オトショップ」（詳細は第2期の記録集を参照）のアーカイブが展示され、講堂前のロビーの展示ケースには、3期生の手帳やミッションの実物が並べられた。来場した人々は、イベントの休憩時間や終了後に、それらを熱心に鑑賞していた。（宮下）

ゲスト・アーティスト寄稿文

トークイベント開催にあたり、第1期～第3期のゲスト・アーティストに、それぞれの視点から新美塾!について寄稿していただいた。寄稿文はトークイベントや、同日に行った展示で紹介した。

本気すぎる下道基行

第1期 ゲスト・アーティスト
山下陽光 (やましたひかる)



下道君とコロナ禍でやることがないねと、週に一度山下道ラジオを始めて、もう3年? いや、4年目突入か? 月曜11時から1時間、お互いの近況報告を電話で話したのを録音してYouTubeにUPしてる。

お互い溜めまくってるストレスをぶちまけているので、どうか聴かないでください。

さて、そんな中で何度も新美塾の話聞きながら、『依頼された仕事にそこまでマジになんなよ!』というテンションで聴いてるけど、下道君はいつでもマジ。そのマジ道から、『生徒を連れて見学に行ってもよかですか?』『よかですよ』と、新大久保の自宅兼アトリエにみんなで来てもらって、ミシンで縫ったりしているところを見てもらったり、服を着てみんなで記念撮影したりして楽しかったんだけど、反応が薄かったと話したら、『あれでもめちゃくちゃアクション良かったし、今までで一番良かったかも』と言われて驚いた。

実際にその後、大学やいろんなところでトークや講演などで呼ばれて話すと、やっぱり反応がめちゃくちゃ薄いんだけど、アンケートにはど熱いことが書いてあったりする。コロナで直接的で密なコミュニケーションが希薄になってもよい、ってことにしてしまってるのか?

自分にもマジ道が伝染したのか、何かのまぐれで横浜トリエンナーレに呼ばれて出ることでなり、キッズプログラムで『先生やってくれ』と言われて、『参加する子ども達にこっちが3000円払うというプランはどうですか?』とめちゃくちゃ破天荒案を出したら、横浜美術館の教育プログラムのスタッフの方々は、『何を言ってるんだ、こいつ?』で否定して終了でいいのに何度も話を聞いて

くれて、7回の対面ミーティングを経て、本来はやるつもりがなかったファッションショーにたどり着けた。

下道君の新美塾の話を何度も何度も聞いていたからこそその到達だったと思うし、スタッフの方々との信頼とそこまでやるんかい?やるんだよ!という体育会系スポコン情緒みたいな、しつこさの美学が滞在制作してた気がします。スタッフとも生徒とも全力以上で信頼関係を作り上げているし何度も会うことでミッチーと呼べちゃう関係を作れるんだろうなと。マジ道の話聞かされすぎてこっちにも伝染しすぎてるので、その後、何度も仕事を断ったり、ぶつかれる相手に巡り会えたりして、有意義だった。こっちはマジなんだよと常に臨戦体制のスイッチが入りまくりの高速道路みたいなテンションなので、そろそろ下道でゆっくりいこうかと思っています。

本当はこれで終了だったんだけど、さっき山下道ラジオを収録したらマジ道が暴走しすぎて冒頭の20分をお蔵入りにしました。やはりいつでもマジ道です。



西大井のあな見学

第2期 ゲスト・アーティスト
能作文徳 (のうさくふみのり)



建築の設計をしています能作文徳です。

私たち(能作文徳+常山未央)の自宅兼事務所「西大井のあな」を紹介しました。

この建物は1987年に建てられたもので、2017年に中古で購入して、住みながら作り続けています。家は常に未完成の状態です。最初は工事現場みたいな荒々しい状態だったのですが、子供が産まれたことで、手すりをつけ、断熱をして、床を上げました。当初は手すりもない「あな」や仕上げのない状態がかっこいいかとも思っていたこともありましたが、子供の安全と健康が大事になりました。駐車場のコンクリートを壊し、土の庭にしました。コンクリートのガラを軽トラックで処分場まで運んで、たくさんのゴミに圧倒されて、建築にコンクリートを使うのはやめようと思いました(使わなければならない時もありますが)。ミミズやダンゴムシもない土を改善するために、溝を掘り、腐葉土、竹炭、落ち葉や枯れ枝を入れていきました。モミジ、ミモザ、ユズ、アジサイを植え、雑草もたくさん生えている生命力のある庭になりました。選定した枝、葉っぱの置き場をつくり、生ゴミをミミズに食べてもらい、その糞を微生物が分解して堆肥化されていきます。

この企画には、塾長の下道さんに誘ってもらいました。

下道さんとは、2019年のヴェネチア・ビエンナーレの展示会で一緒に仕事をしました。

仕事といってもメンバーと一緒にアートをつくりあげる学園祭みたいな感じでした。今でもみんなは何をしているのかなとSNSをのぞいたりして、メンバーの活躍を楽しみにしています。下道さんと一緒に仕事をして感じたのは、できるだけ頭を空っぽにして雑念を無くしてクリエイティブな状態にしておくことでした。とにかく自分の創造性が発揮できるように準備しているように見えました。あとは自分の創造性を育てるには、創造力のある面白い人と一緒にいることが大事です。新美塾!のみなさんは、下道さんと一緒に過ごすことが最大の成果なのではないかと思っています。面白い人に出会い、面白い場所に行って、色々発見することを継続していただけたらと思います。



こころからだあたま

第3期 ゲスト・アーティスト

奥村雄樹 (おくむらゆうき)



「頭でっかち」で制作しても面白い作品は生まれにくい。例：「こういう絵が描きたい!」と狙って描いても失敗する。絵具や支持体や筆や自分の手や体の振る舞いは様々な可能性があるのにそれをエゴで抑え付けるのだから。狙いどおりに出来上がっても何か欠けた詰まらない絵になる。面白い作品を生むには頭を「ちっちゃく」すること。「からっぽ」に近づけること。そうすれば君の心と体は頭による抑圧から外れて目の前の出来事に勝手に反応していく。ひとりりで事物や事象と戯れる。制作が世界の豊かさに関われる。注：君の心も体も「世界」の一部。ゆえにその豊かさは君の外部に広がる世界のそれと等しい。でも「頭」としての君にその豊かさの内実を「知る」ことは無理。ゆえに「表現する」ことも無理。それは行為に文字通り「没頭」したときに初めて自ずと「表現される」もの。そのとき君は様々な素材や物体や出来事の豊かさに触れると同時に君自身(頭)も知らなかった君自身(心と体)の豊かさに触れる。そこから生まれ落ちる作品は面白い。下手でも変な色でも。他の誰とも異なる君の「人柄」が刻まれているから。僕は心と体をひっくりかえした全体を「人」と呼ぶ。そのひとりひとり異なる模様が「人柄」。英語ではパーソナリティ。一般的に「個性」や「自分らしさ」と呼ばれるもの(に近い)。頭は邪魔者ではない。

では「頭からっぽ」で制作に臨む手筈は? 最も簡易で愉快かつ効率的で即席的な方法は制作行為をゲームとして再設定すること。絵を描くことは個人作業が基本なので「一人遊び」になる。誰かとコラボするなら「二人遊び」に。複数人で一緒に踊るなら「人々遊び」だろうか。ゲーム(遊び)には必ずルール(決まり)がある。つまり前提(どんな道具を使うか他)と規則(どんな場合にどうするか等)を事前に定めよう。普段の生活でなぜか気になってしまうことからアイデアを膨らませて。君と君が生きる環境との関係を作品に組み込むために。ルールが決まったらそれに厳しく従って作業を進める。自作自演。「頭でっかち」に陥るのはすべてを思い通りに操ろうとするから。ゲームでは手順が予め定まっているので実行中是否応なく「頭からっぽ」になる。心と体を重圧で強張らせないようになるべくシンプルな行為にしよう。特別な技能や感性なしで実行できるものに。心と体の躍動を底上げするために「縛り」を組み込もう。たとえばサッカーで手の使用が基本的に禁止されているように。プレイを開始したらルールを破ることなく最後までやり抜くこと。そしてそこからどんなものが生成されても受け入れる=あとから手を加えないこと。これは1950年代末から70年代にかけて欧米を中心に多くの芸術家たちが美術や音楽やダンスという垣根を超えて—— コンセプチュアル・アートやフルクサスやポストモダン・ダンスの名のもとに

—— 同時に発展させた方法論のエッセンスを僕なりに抽出したものの。かつて芸術家には作品の形体や表象を統御する能力や天才的な感性が求められていた。でも彼ら彼女らはそんなものちっぽけで貧しいと思った。世界の仕組み(僕たちの心や体の働きも含む)こそが驚異的で面白く考えた。世界の仕組みは「偶然」の出来事として人間の元に到来する。それを制作に組み込むために彼ら彼女らは作品ごとにルールを定めた。どんなスポーツでも試合をやってみないと結果が判らないようにゲームとしての制作の展開や帰結も事前に予測できない。ルールがあるからこそ成り行きが偶然に関われる。だからこの手法で重要なのは結果物の「形体」ではなく制作過程の「行為」こそをルールづけること。ここを取り違えると作者が頭で考えた対象の劣化版を実体化させるだけの貧しい芸術に成り下がる。そうではなく制作の主体を世界に譲り渡そう。そして心と体を持たずゆえに行為を実演できない世界のために君の心と体を貸し出そう。そのとき君は代理人となる。翻訳者となる。

僕は近年ベルギーや日本の美術大学でこの方法論を所謂「コンセプチュアル・アート」や「パフォーマンス・アート」の読み直しと絡めつつ授業で扱ってきた。とりわけ頭の重さに雁字搦めになりがちな人々に向けて。様々な科で学ぶ人々が自分なりのルールの束を着想し遂行する。出力される事物の媒体は様々だけど各自の「人柄」が直に刻まれている点は共通。ゲームの着想には着想者の心のありのままゲームの遂行には遂行者の体のありのまま——たとえば手癖の痕跡を通じて——主に現れる(この手法の肝のひとつに着想者と遂行者の同一人物性がある。でも詳細は別の機会に)。だからゲームとしての制作に取り組むことは自身と出会い直すこと。そして他者への——どんな言葉や仕草よりも鮮烈な——自己(再)紹介。

この手法は幼児には不要だと思う。絵の例を続けるなら「こういう絵が描きたい!」と思っても幼児には出来上りを制御する技術がない。原理的に「頭でっかち」になれない。けれども中高生は「頭でっかち」になりはじめる時期。大人になって頭が凝り固まる前に早めにゲームとしての制作を試すことにはきっと意味があるはず。僕にとって新美塾にゲストとして少し関わり下道さんと相談しつつ「厳しいルールの一人遊び日記」というミッションを組み立て参加者の皆さんに取り組んでもらう経験はこの仮説を世に問う初めての機会だった。実際どうだったのか? は皆さんの将来に委ねたいのだが僕がいま言えるのは次のこと。僕は各自が着想し遂行した様々な「一人遊び」の「物的証拠」を通じてそれぞれの「人柄」と確実にがつつりと出会った。深く広く。一瞬で一挙に。それはいつまでもどこまでも愉しく嬉しいこと。

第3期 ゲスト・アーティスト

ミヤギフトシ

「新美塾!」にゲスト講師として参加したことは、私にとっても貴重な体験となりました。最初に行われたオンラインでのトークと作品上映では、自分の作品が若い人たちにどう見られるのかという不安で、自分の作品が塾生の皆さんにとって、どれだけ関連性があるのか測りかねるところがありました。しかし、すでに作品を知っていた塾生さんがいたり、語りの構造に触れてくれたり、いろんな意見が聞けたりで、とても嬉しかったです。もうちょっと、さまざまな属性の受け取り手のことを信じるべきなのかもしれない、と気付かされた瞬間でした。

オフ会に向けて、私が出したミッションは「100年後の自画像」というものでした。100年後の自分、100年後の世界を想像し、そこにいるかもしれない、いないかもしれない自分の自画像を描いてもらう。元々は非常勤講師をしている多摩美術大学の2年生への課題として出したものでした。大学生は作品としてその回答を提示しましたが、「新美塾!」は文章で応答してもらいました。大学生でも四苦八苦していたのに大丈夫だろうか少し心配ではありましたが、それもまた杞憂に終わりました。時間を超え



た恋物語のようなもの、地球とひとつになるという、村田沙耶香さんの小説を思わせるもの。現在を描くことで100年後の世界を照射するようなもの、そして内容と合致した見事な朗読のパフォーマンスなど、想像していた以上に多種多様でクオリティの高いテキストが揃っていました。塾生の皆さんが今後も美術に関わっていくかはわかりませんが、美術を通して世界を見てゆくという体験は、きっと今後の日々においても大切なヒントをくれるのではないかと、そうだと良いな、と思いました。下道さん、国立新美術館の皆さま、三年間お疲れさまでした。皆さんと塾生さんたちの関係性も、ちょっとの間一緒に時間を過ごただけではありますが、理想的なものに見えました。素敵な機会をありがとうございました!



卒業生（2期生）と保護者のアンケートから

トークイベント開催にあたり、第1期・第2期の卒業生とその保護者の方々に、卒業後の様子についてアンケートで尋ねた。

質問事項

- ① 2025年3月時点での、学年（年齢）を記入してください。
- ② 卒業生（第2期の塾生）へ：新美塾！を卒業してからの、みなさんのその後の様子について、教えてください。
- ③ 保護者の方へ：塾生のみなさんの卒業後の様子について、教えてください。

回答

- ① 高2(17歳)
- ② 1年前くらいからお芝居にハマって、大体月1でお芝居を観に行ってます。美術館も相変わらず色々な所に行っていて、芸術鑑賞を楽しんでいます。
高校2年生になってから高校の美術部に入りました。(とはいってもデッサンを1枚書き上げるのにメンタリティ的に苦戦し、幽霊部員になってますが…)
部活ではあんまり気が進まない分、新美塾時代より少し個人的な趣味として絵を描く頻度が増えたかも…?空を見上げて雲があると絵を描きたくなる人になりました。
昨年から読書にハマって読書をよくするようになりました。休みの日に図書館へ行き、本棚を端から端まで見て読みたい本を何冊か見定めて帰って1ヶ月かけて読んでまた借りに行く…なんて生活をしています。個人的に一番楽しい趣味。
来年受験生ということで、最近は勉強について考えることが多いです。でも、やはり勉強のことは考えたくない。そんな時は趣味の美術館、お芝居、読書のことを考え現実逃避するような生活です。
新美塾でもらった手帳、全然埋めずにプロジェクト参加期間を過ごしていた私ですが、あれから独り言ノートとして立派に成長し、もうそろそろ無くなりそうなところ。今度はどんな手帳を買おうかな…と考えています。
生活自体はあまり変わらず、なんとなく毎日を過ごしております。

- ① 中2(14歳)
- ② 最近、油彩とアクリルに手を出したり、いろんな国の言語を齧ってみたり、時間だけ決めて無計画に歩き回って写真を撮ったり、ライブに行ったりとかをしています

- ③ その後も毎日のように鉛筆やタブレットで絵を描いているようです。去年は美術部で出展した作品で賞をいただきました。本人は照れていましたが、目に見える形となり、部活でも頑張っていることを知りました。また、いろいろな場所に連れ出していただいたおかげで行動範囲も広がり、一人での行動も増えてきています。
新美塾で培ったものが娘の中でも大きく成長していることを嬉しく思い、貴重な体験をさせていただいたことに感謝しております。ありがとうございました。



- ① 高3(18歳)
- ② 大学受験が終わったので、最近家の近くの中古ショップでマイナーすぎるローカルCDや面白CD(大体100円くらい)を探して買ってみることにハマってます！

- ① 中2(14歳)
- ② 【新美塾後にやったこと】
 - ・横浜トリエンナーレユースプログラム
 - ・本を作って売った(zineフェス)
 - ・映像研をつくる(実現不可)【最近好きなこと・始めたこと】
 - 〈ギター〉
 - ・周りの影響あってか、なんとなくでやり始めていました。ギターをすることで今まであまり聞けなかった歌を聴くことになりました。
 - ↑カネコアヤノやキリンジ、BOØWY、斉藤和義、椎名林檎、星野源など
 - 〈漫画・映画〉
 - ・伊藤潤二(漫画家) 富江など
 - ↑好きすぎて短編集プレミアムBOXを買いました!!
 - ・古谷実(漫画家) 稲中卓球部、ヒミズなど

- ↑一番好きでブックオフで買いまくって、全作品コンプしてます!!
- ・ブックオフ巡り
- ↑漫画をずっと買いたいため週一で通います
- ・GANTZ、寄生獣、HUNTER×HUNTERなど、色々な漫画をブックオフやネットなどで買って読みまくりました!!
- ・映画では、ジョーカーや、トゥルーマンショーに衝撃を受けました!
- ・Netflixに入ったので、地面師やサンクチュアリなど、様々なドラマを見るようになりました!
- 全体的にジョーカーや、ヒミズなど今まで見てこなかった、ダークで暗い内容のものを多く見るようになりました。
- 今思うと、これらの大体三分の一は、新美塾の周りの塾生が、好きだった物が多くて、改めて新美塾の影響がとても強かったと感じました。

- ① 中2(14歳)
- ② 最近学年委員会の委員長になりました。そして、委員長として生徒総会や、文化祭での指示役として活動しています。また、来年には中学3年生という、受験期であり、中学校、義務教育最後の年なので思いっきり楽しんで、勉強にも積極的になってます。私が新美塾での経験により、変わったこととして具体的な例が2つあります。それは、美術での鑑賞の時間に、苦にならずとも楽しく自分の感想がスラスラ出てくるようになったこと、年齢の差に関係なく人とコミュニケーションを積極的に取るようになったことです。詳しく言うと、私は新美塾の中で一番下でしたが、年上の人たちが話しかけてくれたおかげで仲良くなり、行動もともにしました。今までの学校生活では話しかけてくれる先輩とは仲良くなれてはいたけど、自分から話すということはあまりしてませんでした。しかし、新美塾に取り組む間に委員会や、部活の先輩達に自分から話しかけ、コミュニケーションを取るようになってきました!!
これらは新美塾での経験が生かされてると思います(新美塾で美術館など見学したあとに、みんなで意見を言い合い、自分にはない考え方がある事がわかり、他にどんな考え方があったのかなどを話し合ったことなど)。

- ① 高1(16歳)
- ② バイトを始めました!バンドは一旦休止中。。。好きな音楽が似ている人たちと仲良くなり始めています!
最近考えていることは高校生活を存分に楽しむにはどうしたらいいかって考えてます!

- ① 高3(18歳)
- ② 2024年の10月までは大学の受験のために今までの美術館の活動について考え直したり、自分にとって美術がどんなものかを考察していました。大学のことが無事終わった後は、Netflixを見たり、好きな音楽を楽しんだりのんびり自由に過ごしていました。新しく始めたことは韓国語の勉強と編み物とボランティアなど。編み物は流行っているからという単純な理由で初めてみたのですが、思っているより楽しくて没頭できたので趣味としてはちょうど良かったです。この前は昔編み物をやっていたおばあちゃんにアームウォーマーをプレゼントして喜んでもらったので始めて良かったなと思いました。ボランティアでは高齢者や障害者の方などの施設に行きました。バイトができないこともあって、有償ボランティアを探して見つけたことがきっかけですが、経験値をあげられる良い機会になりました。慣れない環境での自分の力不足を感じたり、そこで働く人達への尊敬の気持ちなど新しい思考が生まれました。大学でも様々な挑戦をして、経験値を高めます。一番はフランスに留学して、美術や美術館について学んだり、日本とは異なる文化や人柄を直接肌で感じたいです。早く大学に行って、好きなことを学んで自分と同じような志を持った人と出会いたいです!
- ③ 進路について。本プロジェクトで多様な美術館の役割について深く考えたことがきっかけなのか、美術館と美術史を学べる大学に進学します。時間のある今は美術館のボランティアや学校の卒業イベントのためのイラスト制作、運転免許、美術館展覧会の鑑賞など活動的です。本プロジェクトで好きな美術について初対面の人たちと話す事で積極性が出たように思います。今は韓国に夢中で、独学で韓国語を学び、韓国旅行で早速使えてたようです。また美術については苦手と思い込んでいた現代美術が好きになり、大学ではインスタレーションなど空間美術を研究するそうです。たくさんの刺激や出会いや活動、支えてくださったスタッフの皆様、ありがとうございました。



卒業生（1期生）と保護者のアンケートから

質問事項

- ① 2025年3月時点での、学年（年齢）を記入してください。
- ② 卒業生（第1期の塾生）へ：新美塾！を卒業してからの、みなさんのその後の様子について、教えてください。
- ③ 保護者の方へ：塾生のみなさんの卒業後の様子について、教えてください。

回答

- ① 20歳
- ② 大学で都市デザインを専攻し、最近建築事務所でインターンを始めました。建築家を目指そうか考えています。シモキタカレッジという126人が住むシェアハウスに住んでいて日々刺激を受けています。また皆さんとお会いしたいです！

- ① 高3(17歳)
- ② 受験が終わりました！

- ① 大学1年（19歳）
- ② 音楽系の活動では、大学に入ってから、今までやっていたピアノと合唱の活動に加えて、ポピュラーミュージックの勉強をしています。ピリー・ジョエルやスティーヴィー・ワンダーなどの昔の洋楽をピアノと歌で弾き語りしています。
美術系の活動では、大学に入ってから、とびらプロジェクトでアートコミュニケーターとして活動しています。対話型鑑賞のファ



シリテーターを一般のお客さん向けにやったり、現代アーティストと子供向けのワークショップを開いたり、刺激の多い活動を行えていると思います。

これらの活動をしてきて、今の興味は、19世紀以降の音を使った芸術にあります。大学に入ってから、西洋音楽のルール（音の長さ、強さ、高さなど）を超えた表現をしている人たちがいる世界を知りました。サウンドアートと呼ばれる分野です。そこは、音楽とも美術とも言い切れない、とても曖昧で、ワクワクする世界であると感じています。

今後は、シンセサイザー、サンプラーなどの電子音楽の楽器やサウンドプログラミング、フィールドレコーディングなどの新しい表現法にも触れながらサウンドアートについても学んでいきたいと思っています。

新美塾に入って、ミッチー、新美職員の皆さん、1期のメンバーと出会ったことは、確実に自分の人生のターニングポイントだったなと思います。「何か面白いことをしてやろう」や「面白いと思えることをとにかくやってみる」という気持ちの積み重ねが自分の人生を良い方向に導いていくということを新美塾で学びました。本当に新美塾に出会うことができて良かったと思います。

ミッチーには、新美塾卒業後も相談に乗ってもらったりして感謝しかありません！本当にありがとうございます！

また、新美塾のメンバーで集まって何か面白いことができる時が来るのを楽しみにしています。

- ① 高1(16歳)
- ② 高校で友達ができました
- ③ 中学から学校に馴染めなかった娘は、この新美塾1期生を選んで頂きました。自宅での生活に飽き始め、娘が持っている何か分からないものを引き出してくれるものはないか？と悩んでいた頃に「新美塾」を知りました。
初めは、人に会う事やオンラインに抵抗があった様ですが、「何か表現したい。私にも出来るかも。」と、面白いミッションに娘なりに取り組んでいた様に思います。
半年間過ごす中で、「表現は自由なんだ。今の自分は間違っていないんだ。」そう思えたのかも知れません。
お陰様で、高校生活にも慣れ、中学校では参加出来なかった様な行事にも参加し、友達も出来たり、たとえ1人の時でも

堂々としています笑。

娘の作品に楽しくコメントして下さったり、声をかけてくださったみっちーこと下道塾長とスタッフの皆様、そして半年間一緒に過ごして下さった仲間の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。3年間、子供達の為に御尽力くださり、ありがとうございました。書いていたら、あの頃を思い出して、気持ちが溢れてしまった母です。

今は、〇〇（名前）も私も前向きになりました！

感謝でいっぱいです。

素晴らしい経験が出来ました。

ありがとうございました

- ① 高3(18歳)
- ② とんでもねえ造形の生き物の写真を集めています
あまり詳しくは知らないのですがツノゼミの仲間とかカイメン類とか深海魚とかが激ヤバ（アツイ）です
あとは何も考えていません
春から大学生になるのでそろそろ何かを考えられるようになります

- ① 中3(15歳)
- ② 美術系の高校に進学したいという気持ちが強くなりチャレンジしました！

- ① 19歳
- ② 手帳を自分で買って展覧会のポスターや映画の感想などを書いています。書くことで思考を整理するのが自分に合っているので、これからも続けると思います。あとは新美塾！を通して写真を撮ることが前よりも楽しく感じるようになりました。高いカメラを買うといったことはしていないのですが、スマホで撮った写真をよく見返して楽しんでいます。
最近は特定の属性の人達にしわ寄せが行くような風潮を感じていて、戦争をさせないために自分にできることは何かあるかな、もっと生きやすい世の中にしたいなと考えています。
- ③ 新美塾で出会えた人、場所、モノ。娘の心の拠り所、寄り所が増えたと思います。新美塾に参加している頃から卒業してこれまで、アートが与えてくれる豊かさをふんだんに受け取って大切にたたためたり使ったりしている娘の姿を見てると、新美塾に出逢えて本当に良かった！でかした！と心から思います。

- ① 中3(15歳)
- ② 色々なことに挑戦しています、今はデザイン系でいえばGakuでキュレーションを学んでいます、それ以外にはブラストスクールという課外活動を行っています。人間関係は良いです。

最近考えていることは高校生活が忙しそうだなーってことです!!!

- ③ 新美塾1期生として中1で入塾させて頂きました。コロナ禍の2年間に及ぶロックダウンを経て、2年ぶりにニュージーランドから日本に帰国した息子が初めて所属した課外活動のコミュニティが新美塾でした。その後、色々な課外活動に参加しましたが、新美塾で得た、型にハマらずに自分視点でモノごとを見たり、場所を訪ねて実際に体験したりする学びは、唯一無二で、〇〇（名前）の進路決定に影響を与えました。また、下道さんを訪ねて、直島に2回旅行したことが、日本の地方の豊かさを知るきっかけになったと思います。

〇〇（名前）は4月から北海道の高等学校に進学します。今は渋谷Gakuで「歓待としてのキュレーション」に参加しながら、BLAST！SCHOOL8期生として、彼自身がデザインした「Healthy 4 Us」というシュガーフリースナックを用いた食育DIYキットのブランドを、世に送り出す為に活動しています。また、高校進学後はヨーロッパに留学してフードデザインや環境に関するビジネスについて学びたいそうです。

身近なアートを発見する力、自分の発想を形にする力、年齢やタイプにとらわれず集団の中で活動する力、日本全国をフィールドに活動する力、一人で旅する力、が徐々に備わってきていると感じています。

新美塾に参加させて頂きありがとうございました。

- ① 高1(16歳)
- ③ 一期生です。塾生卒業後はより深く、自分探しに迷走しています。
あの頃は、スマホがなく遠出に苦労しましたが、今はスマホ片手に、待ち合わせをして友人と遊びに行くようになりました。興味や関心は自分。
失敗を恐れてしまう自分。
女子との関係も悩みが多い自分。
好きな男子と、仲良くなりたい自分。
未来に期待しつつ、時に絶望感な気持ちになる自分。
思春期のモヤモヤの中、まだ彼女の新美塾は続いています。



スタッフコメント

たしか、新美塾!のオフ会で、下道さんが子供のころに通っていた書道教室の話をしたと思う。それは、海が見える教室で、肝心の書道はあまりせずに海を眺めていた話。何でその話になったかは、はっきりと覚えていないが、私はきらめく波間を見つめる少年の姿を勝手に想像して、何だか新美塾!らしいなと感じていた。

新美塾の3年間は(私は2年目からの参加だが)、世界がいろいろ変化していった年と重なる。時間の使い方や人との交流の仕方も変わり、どんどん日常が効率的になっていった。しかし、新美塾!は、わき目も振らず最短ルートで進むことより、むしろ、迷ったりギターを弾いたりしながら独自のルートで進むことを、楽しんでいるようだった。

書道教室で海を眺めている少年の「よそ見」を、見守る空気が新美塾!にはあったと思う。なぜなら、わき目も振らないなんてもったいないくらい、まだまだ心惹かれる世界はあるから。これから未来に向けて、たくましく進む塾生たちを想像しながら、この先も存分に「よそ見」をしてもらいたい、と私は願っている。

柴澤 希

オンライン集会にラジオにオフ会、数々のプログラムと共に駆け抜けた「新美塾!」での半年間は、驚きとワクワクの連続だったように思う。固定概念を軽々と飛び越えるような豊かな発想力、「自分の好き」へのまっすぐさは、きらきらと、そして時にみずみずしく私の目に映った。どうやら私は大人の階段を上ると共に、その感覚をどこかに置いてきてしまったらしい。「新美塾!」は、忘れてしまった中学生、高校生の頃の自分を思い出させる場だったようにも感じる。

塾生たちはこれから新たな出会いや挑戦を通じて若葉のようにぐんぐんと成長していくのだろう。「新美塾!」という土壌を離れ、それぞれの場所で今日も育っていく彼らを、遠くからそっと見守っていたいと思う。

神 和夏

「新美塾!のスタッフ」というテーマで少し書かせていただきたい。

スタッフの私は、下道さんが塾生を導いてくださる後ろで肅々と事務作業をしながらも、塾生と一緒にミッションに取り組み、感想を発表する。“表現の学び舎”に居合わせている以上、スタッフの私も1人の人間として丸裸になる必要があり、スタッフとユース、2つのグラウンドを行ったり来たりするような立場に半ば混乱しながら、私はこの2年間、新美塾!に携わっていた。

しかし、新美塾!というユースの居場所においては、大人たちが模範解答を持っていないことは非常に重要だったのだろうと思う。混乱したままでも、同じグラウンドで一緒に走っていれば良かったのだ。私が新美塾!において担うべきだったポジション名は、エデュケーターでも、マネージャーでも、もちろん塾生でもなく、“なんとなくいつも居る人”だった。

3期生達が見せてくれた沢山の表現の芽吹きと、「新美が特別な場所になった」という2期生の言葉、卒業して2年以上経った今でも新美に来てくれる1期生が、私をその結論に導いてくれた。思い返せば、混乱も楽しいものだった。

宮下 咲



新美塾!は「表現のための塾」だった。偶然が重なり特別な環境でできた一過性のプロジェクトでもあった。

だけど「学び」の環境作りのために必要な普遍的な種が色んな所に落ちている場でもあったと思う。

その種の1つは「目の前のものごとを通して世界を見つめる目」だ。その目は、自分の気持ちや生活、はたまた社会に向けられることもあれば、スタッフはユースの内面、プロジェクトの状況、世の動向に目を向けつづけたことだろう。塾長はアーティストとして鍛えられたその目を、参加したユースに存分に注ぎこんでいたし、参加したユースも、それぞれの目でいろんなことを見つめる力をつけていたかもしれない。

「基本的に前回と同じことをする気はない。だけど、みんなに合わせていろんなことを考えていくので大変なことになる。」とは、3期目の最初のオフ会で塾長が話した言葉だが、この「いろんなこと」のスタートが、やっぱり見つめることからだったと思う。

だけど一人一人をじっくり見つめて向き合い続けるには適切な期限や関係性、空間がある。

だからこそ3期目の終了に至ったのだろう。それまでに見つめてため込んだノウハウを効率的に披露し「新美塾的」なものを出せたかもしれないが、それは「表現」にとって致命傷のような場になる気もする。

現代社会では一人一人を見つめる前に、すでに「やるべき」ことが効率よく準備されているし、それは社会が成長するには必要な準備だ。

そのようななかでも、やっぱりどこかで一人一人とじっくり向き合うことからはじめることの大切さを誰しもが抱いているはずだが、それは中々難しいことなんだと痛感もさせられた。

粘り強くお互いに向き合い続けてくれていた新美塾!での日々を振り返ると、いつもそんな気持ちになって、自分の日常で小さく何かを見つめ続けようとしていた。この記録集が誰かを、そういった気持ちにさせてくれるといいなと願う。

丸尾隆一

新美塾!の活動が終わった。振り返りのコメントを書こうと思ったが、第3期をもって新美塾!の活動を終了することを決断した立場上、どうしても、どこかに言い訳や後悔が混じりそうな気がする。今は、前を見ていたい。卒業していった塾生たちのように。だから、ここには感謝と決意の言葉を書きたいと思う。

1期生・2期生・3期生のみんな、新美塾!に参加してくれて本当にありがとう。これからもずっとみんなが選ぶ道を応援しているから、自分の感性と情熱を信じて歩いてほしい。そして、新美が次の決意表明をちゃんと実行しているか、見ていてほしい。(有言実行できていなかったら、突っ込んでください。)

国立新美術館は、10代のための長期プログラムを近い将来に必ず再開します。下道さんと開いた新美塾!とは違うかたちになるとは思いますが、ユースと一緒に「表現」について考え学ぶ場をつくる取り組みを続けていきます。新美塾!を礎として、これからの時代を生きるユースとともに。

吉澤菜摘



NACT YOUTH PROJECT 2024 新美塾!

主催：国立新美術館
事業支援：株式会社 小学館
協力：モレスキン ジャパン株式会社

塾長：下道 基行
3期生 (50音順)：いけば、おおもり、こなつ、だにー、たまき、ちさと、
ななみ、みふう、らら、りお、りく、りら
国立新美術館スタッフ：吉澤 菜摘、宮下 咲、柴澤 希、神 和夏
国立新美術館インターン (記録集 制作協力)：弭書榛 (ミ・シヨシン)
撮影・ビデオグラフィー：丸尾 隆一

《NACT YOUTH PROJECT 2024 新美塾!》記録集

編集：国立新美術館、下道 基行
記録集デザイン：畑 ユリエ、松村 衣子
発行：国立新美術館 〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2
発行日：2025年7月31日

©国立新美術館
ISBN 978-4-910253-17-6

謝辞

新美塾!のためにご協力いただいた
関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

奥村雄樹
ミヤギフトシ

東京国立博物館
森美術館
ユトレヒト

(敬称略・50音順)

小学館 SHOGAKUKAN

国立新美術館の
NACT YOUTH PROJECT 2024 新美塾!は
株式会社 小学館よりご支援いただいております。



国立新美術館ウェブサイトでは
新美塾!第3期のダイジェスト動画をご覧いただけます。



